178

# 岩石礦物礦床學

# **第七卷 第一號** (昭和七年一月號)

# 研究報文

駒ヶ岳産汚石の化學岩石學的研究……理學博士 神 津 俶 祐 理 學 士 瀬 戸 國 勝 所 展 國産エデリン輝石藍閃石英片岩に就いて…理學博士 鈴 木 醇 正宅鳥及び樟前岳産灰長石研究補遺……理 學 士 渡 邊 新 六 駒ヶ岳新噴出岩中に於ける硬石膏……理 學 士 吉 木 文 平

# 研究短報文

ミアスク産鐵雲母の化學成分…………理 學 士 鶴 見 志 津 夫

#### 評論及雜錄

結晶内の構造群につきて………理學士 高 根 勝 利

# 抄 錄

礦物學及結晶學 本邦産新礦物 Nagatelite に關する新考察 外 11 件 岩石學及火山學 パン殼狀火山彈の發生史 外 8 件

金 屬 礦 床 學 金屬礦石の成生と其結合狀態に就て 外4件

石油礦床學 Zwolle油田の石灰岩含油層 外4件

窯業 原料 礦物 耐火性酸化物の熱膨脹 外5件

石 炭 石炭及石炭製品中の Germanum の存在 外 5 件

#### 會報及雜報

東北帝國大學理學部岩石礦物礦床學教室內 日本岩石礦物礦床學會

# The Japanese Association

Mineralogists, Petrologists and Economic Geologists.

President.

Shukusuké Kôzu (Chief Editor), Professor at Tôhoku Imperial University.

Secretaries.

Manjirô Watanabé (Editor), Professor at Tôhoku Imperial University. Junichi Takahashi (Editor), Professor at Tôhoku Imperial University. Seitarô Tsuboi (Editor), Professor at Tôkyô Imperial University.

Assistant Secretary.

Minéichi Masuda, Assistant Professor at Tôhoku Imperial University.

\*Treasurer.\*

Kunikatsu Seto, Assistant Professor at Tõhoku Imperial University.

\*\*Librarian\*\*

Kenjirô Katô, Lecturer at Tôhoku Imperial University.

Members of the Council.

Nobuyo Fukuchi, Chief Economic Geologist of Furukawa Mining Cc. Takeshi Hirabayashi, Professor at Tôkyô Imperial University. Viscount Masaaki Hoshina, Member of Diet.

Tsunenaka Iki, Professor at Tôkyô Imperial University.
Kinosuke Inouye, President of Ryojun College of Engineering.
Tomimatsu Ishihara, Professor at Tôhoku Imperial University.
Nobuyasu Kanehara, Director of Imperial Geological Survey of Japan.
Probaji Katayama, Chief Feoropaija Geological Collegical Survey of Japan.

Ryôhei Katayama, Chief Economic Geologist of Nippon Mining Co. (Kuhara Mining Co.)

Takeo Katô, Professor at Tôkyô Imperial University.
Mikio Kawamura, Professor at Kyûshû Imperial University.
Shukusuké Kôzu, Professor at Tôhoku Imperial University.
Atsushi Matsubara, Professor at Kyôto Imperial University.
Tadaichi Matsumoto, Professor at Kyûshû Imperial University.

Addaichi Matsumoto, Professor at Kyūshu Imperial University. Motonori Matsuyama, Professor at Kyōto Imperial University. Shintarō Nakamura, Professor at Kyōto Imperial University.

Seijirô Noda, General Manager of Asô Co.

Takuji Ogawa, Professor at Kyôto Imperial University.

Yoshichika Oinouye, Chief Geologist of Imperial Geological Survey of Japan. Ichizô Omura, Chief Economic Geologist of Nippon Oil Co.

Yeijirô Sagawa, Chief Economic Geologist of Mitsui Mining Co.

Toshitsuna Sasaki, General Secretary of Furukawa Mining Co.

Isudzu Sugimoto, General Manager of Furukawa Mining Co. Iunichi Takahashi, Professor at Tôhoku Imperial University.

Korehiko Takenouchi, President of Nippon Mining Co.

Hidezô Tanakadaté, Lecturer at Tôhoku Imperial University.

Shigeyasu Tokunaga, Professor at Waseda University.

Yaichirô Wakabayashi, Ex-Chief Mining Engineer of Mitsubishi Mining Co.

Manjirô Watanabé, Professor at Tôhoku Imperial University. Mitsuo Yamada, Professor at Tôhoku Imperial University.

Abstractors.

Kenjirô Katô Osatoshi Nakano, Junichi Takahashi, Junichi Ueda, Pumpei Yoshiki, Yoshinori Kawano, Tadahiro Nemoto, Katsutoshi Takané, Manjirô Watanabé, Rensaku Suzuki

Mineichi Masuda, Kunikatsu Seto, Shizuo Tsurumi, Shinroku Watanabé Tsugio Yagi,

# 岩石礦物礦床學

第七卷第一號

昭和七年一月一日

研 究 報 文

# 駒ケ岳産浮石の化學岩石學的研究 (2)

理學博士 神 津 俶 祐理學士 瀨 戶 國 勝

余等は本誌第五卷第六號に於て本研究の前半を發表せり。該論文に述べたるが如く,本浮石の石基は主として玻璃のみよりなるを以て,其中に散在する斑晶を分離するに易く,從つて斑晶との混比,玻璃の化學成分等を檢出するを得て,浮石生成當時に於ける物理化學的關係を知る主要なる資料を得たり。斑晶中,斜長石は他の斑晶礦物即ち輝石及び磁鐵礦の如き有色礦物より容易に分離し得るを以て,本岩石の礦物成分としての混比を知るを得たるのみならず,又其平均化學成分を檢出するを得たり。猶ほ斜長石斑晶が均一質の者にあらざるは其光學的研究によりて明かにして,筆者の一人と渡邊新六學士との論文に詳述せるが如し。

前論文に記せるが如く,浮石を構成する斑晶と 石基玻璃との 混比を重溶液法にて測定せるに

<sup>1)</sup> 神津,渡邊新六,岩石礦物礦床學,第六卷第二號,51-69.

なり。然して斜長石の化學成分,輝石及び 磁鐵礦の混合成分及 石基玻璃の 化學成分等の分析の結果は 旣に發表せる所なるが,有色斑晶中の 紫蘇輝石 及普通輝石の化學成分,物理性質及其混比等に關しては 未だ發表 せざるを 以て,以下本報告に述べんとす。

#### 普通輝石ご紫蘇輝石との化學及物理性質

此等兩輝石に磁鐵礦を混ぜる量は浮石全量の17.63%なるは前述の如し。 これ等輝石中には斜長石、磁鐵礦等を相當量包裹す、又普通輝石は紫蘇輝石 と集合をなす場合少なからず、然して前者は必ず後者を抱擁する關係を保 てり、故に普通輝石物質を得ん為めには紫蘇輝石物質を混じ易きを以て、特 に注意を要す。

第	六	表	
	I.		II.
SiO <sub>2</sub>	51.33		51.70
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.45		1.72
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.83		0.30
FeO	19-40	******************	18.00
MgO	25.04		25.09
CaO	1.03		2.87
Na 2O	0.43		
K <sub>2</sub> O	0.18		
H <sub>2</sub> O <sub>+</sub>	0.51		
H <sub>2</sub> O <sub>-</sub>	0.04		
TiO <sub>2</sub>	0.87		******
MnO	0.09		0.36
Total	100-20		100-04

I. 駒ヶ岳産 紫蘇輝石, 瀬戸分析。

II. Buffalo, Colorado 紫蘇輝石安山岩中の紫蘇輝石, Hillebrand 分析。

<sup>2)</sup> 神津, 瀨戶, 岩石礦物礦床學, 第五卷第六號, 255-264.

普通輝石と紫蘇輝石との分離 浮石を細粒とせる者より有色礦物を分離し、 Bausch and Lamb 製 Binocular microscope の下にて普通輝石と紫蘇輝石とを分離せり。兩者は其結晶癖と破口に於ける色により容易に區別するを得。普通輝石は緑色なれども紫蘇輝石は褐色を呈す。既に記せるが如く普通輝石中に紫蘇輝石を包裹する狀態は此場合明かに認むるを得るなり。

如斯分離せる兩種の輝石を各別々に 細粒となし, 馬蹄形 マグネツトにて 磁鐵礦を除去し, 更に Thoulet solution にて包裹物として存せる斜長石を 除去し, これを檢微鏡下に檢せるに兩者共相當の 純粹なるを 示せるを以て 化學分析に附せり。

紫蘇輝石の化學成分 上記の如くして 精撰せる 資料につき、化學分析を施せるに、其結果は第六表に見るが如し。 本紫蘇輝石 の化學成分は 1883 年 Hillebrand が Canada Buffaro 産 augite andesite 中の Hypersthene につきて分析せるものと近似すれども、其光學性質等の 研究せる 者見當らざるを以て、互に比較考究する 能はざるは遺憾なり。 今駒ヶ岳 産紫蘇輝石の分析の結果より其分子を一般に行はる、方法にて重量比にて算出する時は

(Fe, Mg) SiO <sub>3</sub>		
Ca (Fe, Mg) Si <sub>2</sub> O <sub>6</sub>	3.54	11
Ca Al Si <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		
Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub>	1.21	11
Fe TiO <sub>3</sub>	1.66	11
1	02.26	

となり、(Fe, Mg) SiO<sub>3</sub> は全量の約 95 % を占め本成分の主なる者なり、今他の少成分を不純物としこれを除去し MgSiO<sub>3</sub> 分子と FeSiO<sub>3</sub> 分子との百分比を重量比及分子比に算出すれば次の如し。

$MgSiO_3$	 65.07	in wt%	 71.09	in mol%
FeSiO <sub>3</sub>	 34.93	11.	 28.91	"

W. F. Hillebrand, On hypersthene andesite. Am. Journ. Sci., Vol 25. 139-144, 1883.

Winchel 氏は二十余種の Enstatite 及 Hypersthene の化學分析と光學性質とを集め作圖によりて兩性質の間の關係を求めたり。今此の作圖より71 MgSiO<sub>3</sub>, 29 FeSiO<sub>3</sub> なる成分を有する斜方輝石の屈折率を求むる時は約

 $\alpha = 1.698$ ,  $\beta = 1.706$ ,  $\gamma = 1.711$ 

なり。今駒ケ岳産紫蘇輝石の屈折率を浸液法にて測定せるに

 $\alpha = 1.698, \quad \beta = 1.706, \quad \gamma = 1.713$ 

にしてすの價に稍々差異あれども其他は全然一致せり。Winchel の作圖は 其資料と方法との示すが如く化學成分と光學性との關係は其大要を示すを 目的とするに在るを以て、これを細論に用ゆるは當らず、然れども兩者の間 に一致を見たるは本實驗の結果が從來の研究の總括的結果と大差なき者と 考ふるを得べし。

普通輝石の化學成分と光學性質 紫蘇輝石の場合の如く, 精撰せる 試料に就きて化學分析を行へる結果は第七表に見るが如し。

Adm		- man	
第	t	表	
	I.		II.
SiO 2	50.40		50.94
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.63		3.37
Fc <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2.06		2.05
FeO	9.74		7.41
MgO	13.37		14.59
CaO	20.65		20.34
Na <sub>2</sub> O	0.66		0.61
K <sub>2</sub> O	0.23		0.18
H <sub>2</sub> O+	0.48		0.08
H <sub>2</sub> O	0.03		
TiO <sub>2</sub>	1.13		0.96
MnO	0.09	•••••	0.10
Total	100.47	- 10	100.63

I. 駒ヶ岳産, 普通輝石, 瀨戶分析。

II. Stromboli 產普通輝石, Washington 分析。

<sup>4)</sup> A. N. Winchel, Studies in the Pyroxene group. Am. Journ. Sci., Vol 6.  $504-520.\ 1923.$ 

本分析の結果は偶然にも筆者の一人(S. K)が曩きに Washington博士 と共に研究せる Stromboli 産輝石の成分と酷似す。

今 Washington 博士の行へる方法と同じ方法にて其分子式を算出すれば

野	駒ケ岳産			Stromboli 產		
	輝	石		輝	石	
$NaFeSi_2O_6$	4.7	in wt	%	5.5	in wt %	
$CaMgSi_2O_6$	56.6	11		61.1	"	
CaFeSi 2O6			*****	19.8	11	
MgSiO <sub>3</sub> Fe SiO <sub>3</sub>	11.2	11		11.4	11	
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> +Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>			×	3.4	11	

上に示すが如く駒ヶ岳産普通輝石と Stromboli 産のものとは、Diopside 分子と Hedenbergite 分子との間に多少の差あるも、其合計の差は2%を 越えざる者なり。

今兩輝石の光學性質を比較するに次表の如し,但し駒ヶ岳産輝石の屈折 率は浸液法によりて測定せる者なり。

駒	ケ岳産	Strom	boli 產
当	通輝石	新·	通輝石
α	1.691		1.693
β	1.697		1.699
γ	1.718		1.719
c∧Z	430	,	43 20'
2 V	large		58°21′

即ち駒ヶ岳産輝石の屈折率は Stromboli 産の者に比して僅かに低きも略ぼ同一なりと言ふを得べし。

火山岩特に基性火山岩を構成する普通輝石は, 其斑晶を成す 場合と 石基 の成分を形成する場合とにより, 其化學成分は勿論其物理性質も變化し, 後

<sup>5)</sup> S. Kôzu and H. S. Washington, Augite from Stromboli. Am. Journ. Sci., Vol 45, 463-469, 1918.

者は前者に比して Wollastonite (CaSiO<sub>3</sub>) 分子を減じ又光軸角小となり Pigeonite と稱する種圏に分類し得らる、とは、F. W. Barth 氏の最近の研究によりて一層明かとなれり。

曩きに余等の研究せる Stromboli 産普通輝石の産狀は,結晶火山彈として火口の周圍に抛出せられたる者なるを以て,斑晶に屬すべきものなり。 又駒ヶ岳産の者も浮石の斑晶に屬するは明かなり。

Barth 氏に従へば基性火山岩の斑晶質普通輝石の化學成分の特徴は、Hy及 En 分子は其混比を變化するも Wo 分子は 50 % 内外にして此値より著しく變化せざるにあり。今同氏の計算法により 駒ヶ岳及 Stromboli 産普通輝石の Hy, En 及び Wo 分子を計算する時は

	駒ヶ岳	產	Stromboli 產	
	wt. %	mol. %	wt. %	mof. %
Ну	16.02	13.54	12.37	10.35
En	37.00	41.28	40.87	45.15
Wo	46.98	45.18	46.76	44.50

にして、駒ヶ岳浮石の如く  $SiO_2$  を 61.41% を含む中性岩石に於ても、其斑晶質普通輝石は基性岩中の者と略ぼ同様なる化學成分を有し、且つ Wo 分子も 50%に近き量を有する特徴を有す。

紫蘇輝石と普通輝石との混比 駒ヶ岳新噴出の浮石中には二種の輝石存在 するは前文によりて明かなり。顯微鏡下の觀察によれば紫蘇輝石は普通輝 石に包裹せられて産する事屢々なれども,其反對の 場合即ち 普通輝石の紫 蘇輝石中に存する事は全くこれなきを以て,普通輝石は紫蘇輝石より後ま て結晶作用を續けたる場合有之しは疑を入れざる所なり。然れども何れが

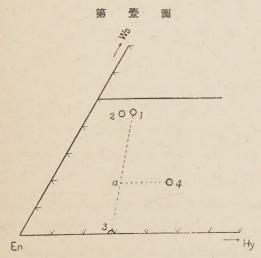
T. F. W. Barth, Mineralogical Petrography of Pacific Lavas. Am. Journ. Sci., Vol 21, 1931.

T. F. W. Barth, Crystallization of Pyroxenes from Basalts. Am. Min., Vol 16. No. 5. 195-208. 1931.

先きに結晶を始めたるやを證すべき顯微鏡的事實は認むる能はず。然し吾 人の幾多の經驗より總括する時は紫蘇輝石は普通輝石より先きに結晶を始 めたるが如し。

本熔岩は爆發によりて急激に冷却して其結晶作用を急に停止せる者なるが,此時迄に紫蘇輝石と普通紫蘇輝石との晶出せる量の割合は如何ばかりなりしかを知るは本岩の物理化學關係を発むるに必要なる資料なるは勿論なり。

今普通輝石と紫蘇輝石の化學成分を分子比に於て夫々(Wo=45.2, En=41.3, Hy=13.5) 及び (En=71.1, Hy=28.9) とする時は第一圖に於て見



- 1. Komagataké augite.
- 2. Stromboli augite.
- 3. Komagataké Hypersthene.
- 4. Komagataké augite 及 hypersthene の浮 石中に存在する混合成分。

るが如く兩輝石の岩石 中に存在する混合化學 成分は兩輝石成分を結 べ 1~3 線上の何れか の點にて示さるべきな り。

前に記せるが如く, 浮石中の兩輝石及磁鐵 礦の量は母岩に對し 17.63%にして其の化 學成分は前報告第三表 (4)に記せるが如し。故 に其成分より磁鐵礦の 成分を除去するを得る

とせば其殘余の成分は前記の如く附圖に於ける 1~3 線上に落ちざるべか らず。今試みに第三表(4)の化學成分より norm を算出する時は次の如し。

Ilmenite 2.8	7
Ilmenite 2.8 Magnetite 14.8	6
Orthoclase 1.8 3.2 Albite 1.4	
Albite 1.4	
Wollastonite 14.7	
Wollastonite 14-7 Enstatite 29-6 Hypersthene 32-1	3
Hypersthene 32.1)	
97.2	0

上式に於て長石分子を不純物として除去する時は浮石を構成する有色礦物中磁鐵礦は約19%にして輝石成分は約81%を含む。 今此輝石成分を Hy, En 及び Wo の成分に重量比及分子比に算出する時は

	wt. %	mol. %
Ну	 41.96	38.30
En	 38.75	43.17
Wo	 19.29	18.53

にして此分子比を正三角形圖示法に從つて記入すれば第一圖(4)にて示され、1~3線より遙かに遠かれり。これ本分析の結果は前記普通輝石及紫蘇輝石の化學成分より導かれ得る成分より FeO に富み MgO に乏しきを示す者なり。

かくの如き結果に達したる原因に就きては未だ判明するに至らざれども 假りに其原因として起り得べき場合に就きて二三考察せる所を次に記述せ んとす。

- 1. 浮石より分離せる有色礦物中に磁鐵礦,兩輝石以外にFeOを多量に含有する他の礦物存在せしにあらずや。
- 2. 化學分析に於て MgO に對し FeO を特に多からしめたる分析上の誤差を考へ得らるゝや。
- 3. 紫蘇輝石と普通輝石とを 化學分析試料に分離する 場合に先づ擴大鏡下にて結晶癖と色によりて分離せり, 從つて先に 比較的大晶を 撰出する傾

きあり、故に此等大晶は殘存せる小結晶の化學成分よりFeO に乏しくMgO に富みたる者にあらざるか。但し此場合小晶と雖も斑晶を成せる者たるは明かなり。

以上三つの項目に於て,第一は分析に附せる試料中に兩輝石及磁鐵礦の外に FeO に富む他の礦物を混ぜるにあらずやとの疑なり。余等の浮石及分析試料を顯微鏡下にて觀察せる範圍內にては,上記三礦物の外に包裹物として存在せる斜長石,玻璃及燐灰石等の少量を含むのみにして,他の礦物特に FeO に富む礦物の如きは認むるを得ざりき。

第二項は分析上 MgO を少量に、FeO を多量に測定し誤れる場合を生じたるにはあらざるかを 疑はしむる 者なれども、第一圖に於て4の點に於ける化學成分とは

	4 に於ける	化學成	分 a に於	ける化學成分
$\mathrm{SiO}_{2}$		52.30		54.46
FeO	*************	22.89		14.73
MgO		15.50		21.40
CaO		9.31		9.41

にして、兩者に於ける Fe )及 MgO の差異は相當に多く、普通分析上に起 る誤差の範圍外にある者なり。

但し余等は未だ磁鐵礦を直接分析に附せず又其量をも測定せざるを以て 其影響に就きては今此所に論ずる能はず。

第三項は紫蘇輝石及普通輝石或は 其中何れかの一種に, 大形結晶と 小形結晶との間に, 化學成分上特に MgO 及 FeO に於て, 著しき差異ある者にあらずやとの疑なり。

此問題を解决するには、大形結晶と小形結晶とを分離して、化學分析を行 ひ又兩者の物理的性質を精密に測定せば可なれども、其手續き簡單ならざ るを以て未だ其結果を見るに至らず。然れども大形結晶の累帶構造につき ては渡邊新六學士の觀察せる者ありて、大いに參考となすを得べし。即ち 紫蘇輝石に於ては累帶構造存すれども極めて不明瞭の者なり。然るに普通 輝石に於ては前者に比して明瞭にして、異なれる帶に於て光軸角(2Vに於 て)約10°の差を生ずる場合あり。故に其化學成分にも差異を生ずべきは 明かなり。然れども2Vの變化に對する化學成分の變化する關係は未だ明 かならざるを以て、直ちに 累帶の化學成分の變化を知るを得ざるなり。然 れども其變化たるや第一圖に於ける(4)點と(2)點との差異を生ぜしむる が如き大なる者は現在に於て余等の推察し得ざる所なり。

个回研究せる紫蘇輝石と普通輝石との化學成分と其混合物との化學成分とは上述の如き關係を呈せるを以て、紫蘇輝石と普通輝石との混比は 直ちに此等分析の 結果より 算出するを 得ず。然し 兩輝石混合化學成分 (第三表 4)中の CaO は其大部分普通輝石中の Wo 分子を構成すべきものとの推測を許し、FeO 及 MgO は互に置換し得らる、者と考ふる時は、兩輝石の混

要するに上記の關係につきては更に研究して後日報告する所あるべし。

Hypersthene: Augite = 58.9: 41.1 in mol %.

比は第一圖のa點に於て示され、紫蘇輝石と普通輝石とは

にて混ずる者と考ふるを得べし。

此結果は上記の如く種々の假定の下に得られたる者なれば今直ちに其實値として取扱ふを得ざれども, 浮石の 薄片を顯微鏡下に檢して 紫蘇輝石は普通輝石より多きは明かなり。(未完)

#### 正 誤

本誌第5 卷第5 號 213 頁第壹表イネス石の化學成分中 Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> = 6.40 % は 0.40 % の誤植に就き之を修正す。

# 天ᅺ國産エヂリン輝石藍閃石英片岩に就いて

理學博士 鈴 木 醇

#### 産 出 狀 態

北海道各地の河川流域の轉石中に往々結晶片岩類の礫を混じて居る事は古くより注意せられた所であつて、これ等の或るもの、産地並びに岩質或は化學成分に就いては、己に神保博士、八谷學士 H.S. Washington 等の研究が發表せられて居る。筆者は 矢部教授の厚意により、先年 西川學士が天鹽國留萠町の北部を流れて居る小平蘂川(R. Obirashibe)の中流で採集された十數個の結晶片岩礫(主に藍閃片岩類)を檢する 機會 を得たが、同礫中に極めて興味深きエヂリン輝石、藍閃石英片岩の一片を發見する事を得た。

エヂリン又はエヂリン輝石がアルカリ 火成岩中に含有せらる、事は、本邦に於いても己に隱岐、朝鮮その他に於いて比較的多數の 例が 知られて居るが、同礦物が結晶片岩中に産出するものに關しては、本邦に於いて未だその例を見ないのみならず、他外國に於いても 極めて稀なものと 見る事が出來る。

述べんとするエデリン輝石藍閃石英片岩は,前記の如く,小平蘂川砂利中の一轉石として發見せられたものであつて,それが何所に源を有するものなるかに就いては全く不明である。該地方の.地質圖を見るに,小平蘂川流域には第三紀層並びに白雲紀層が發達するのみで,何所にも變質岩等の露出を見る事が出來ない。故にこれ等の礫は原塊より直接削り出されたもの

K. Jimbo, General Geological Sketch of Hokkaido with Special Reference to the Petrography, (1892) p. 5.

<sup>2)</sup> 八谷彪一:地質學雜誌,第9卷 (明治35年)98 頁及147 頁。

<sup>3)</sup> H. S. Washington: Am. Jour. Sci. 4 Ser., Vol XI. (1901), 35 頁o

てはなく、上記二層中のいづれかの礫層中より 轉び出たものと 見るのが最も妥當である。但しこれ等結晶片岩の真の原塊が何所に存在するかに就いては、遠に斷ずべきでは無いが、これ等が北海道中央由脉に沿うて發達して居る結晶片岩類のあるものに極めて類似の岩質を示して居る事は注意すべきである。

#### 岩石の性質及成分礦物

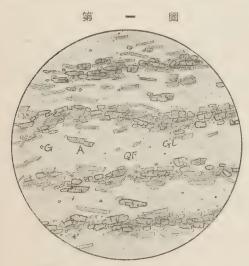
本岩石の性質に關しては、河礫として發見せられた所の2×3 輝程の岩片及びそれより得たる數個の薄片を基礎としたものである。乃ち本岩片は緻密堅固で、一見青灰色であるが、仔細に觀察すれば暗青灰色と淡灰色との薄層が変互し、且稍々片狀構造を示して居るものである。極めて 細粒の集合である為め、個々の組成礦物は肉眼で識別する事を得ないが、顯微鏡下に於いては石英及小量の曹長石の細粒を主體とする基地中に、略一定の 方向 に排効する所の比較的多量 の藍閃石及びエヂリン輝石を含有し、更に それ等の間に柘榴石の微粒を散點せしめて居るものである。各礦物間の關係 (第一圖)は次の如くである。

石英〉藍閃石〉エデリン輝石〉曹長石〉柘榴石

石英 は 本岩中最も主要なる部分を示せるもので, 稍凸凹した 輪廓を 有する細粒の集合體をなして居る。粒の長徑は約0.2 粍内外でその 延長した 方向は藍閃石又はエヂリン輝石等の排列の方向に一致して居る。大部分は極めて新鮮であるが多少波狀消光を示して居るのが常である。

藍閃石 は石英に次ぐ主要な礦物で、エヂリン輝石の結晶と略平行に相混

じて産出する。一般に、劈開の發達した 細い 柱駅結晶を示し、その 長徑は  $0.1\sim0.3\,\mathrm{mm}$  である。 消光角は大體  $c:Z=5^\circ$  で著しい多色性を示す事を特徴とする。 その關係は X=淡黄菫色, Y=淡藍菫色, Z=藍色; Z>Y>X.



エデリン輝石 は長徑 0.1~0.2 mm の柱狀結晶を示すが、劈開と同時に主軸に略直変する不完全な割目が發達して居るため、藍閃石に比し稍不規則な形狀を示して居る。最大消光角は c: X=25°であるが、累帶構造を示すため、結晶の内外で多少の差異を示すものである。多色性は稍々著しく、その關係は X=草綠色、

Y = 淡綠色, Z = 黃褐色, X > Y > Z,

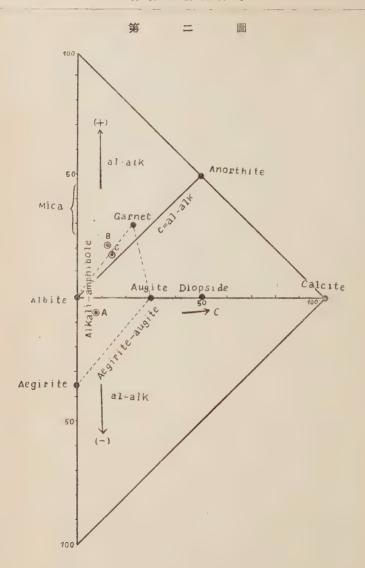
柘榴石 は平均約0.01 mmの微粒で,多くは斜方十二面體を示して岩石中 に一様に散點する。無色の等方體で極めて高い屈折率を示すものである。

## 化 學 成 分

本岩石の化學成分は第一表の如くである。(北大, 地質學礦物學教室金成 明氏分析) 比較のため四國の三波川系中の千原產藍閃石絹雲母石英片岩並 びに高越産絹雲母石英片岩の分析を併記する事とする。

<sup>1)</sup> Jour. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ. Series IV. Vol. I. No. 1, p. 69.

<sup>2)</sup> 地學雜誌, 第39卷, (1927)



上記の分析を吟味するに、エヂリン輝石、藍閃石英片岩は併記した他の二 岩石と同様に、珪質に富む水成岩より 變質成生したものである事は 明かである。今これ等岩石の礬土、アルカリ、石灰等の關係を知るため (al-alk)-Cの闘表を用のれば第二圖の如くである。弦に最も注意すべき事は、本岩(A)

	第一	表	
	A	В	С
SiO <sub>2</sub>	85.80	72.30	.84-18
TiO <sub>2</sub>	tr.	0-10	0.17
$Al_2O_3$	2.73	12.80	5.10
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.70	4.35	2.71
FeO	2.60	3.25	0.79
MnO	0.28	*****	0.59
MgO .	3.00	1.85	1.35
CaO	1.20	1.37	0.86
Na <sub>2</sub> O	1.90	2.59	0.47
K <sub>2</sub> O	0.86	1.53	1.53
$P_2O_5$	0.31	*****	tr.
$H_2O$		0.56	
Ignition loss	0.10		1.57
Total	100-51	100.70	99-82
si	632	435	818
al	12	35.5	. 29
fm	61	41	48
С	9	7	9
alk	18	16.5	14
k	0.23	0.28	0.68
mg	0.54	0.32 .	0.45
c/fm	0.15	0.17	0.19

- A) エデリン輝石藍閃石英片岩。天墭國小平蘂川産。
- B) 藍閃石, 絹雲母石英片岩。愛媛縣千原蘋山產。
- C) 絹雲母石英片岩。德島縣高越鎖山產。

がその分子量比に於いて、アルカリが礬土に比し稍々多量なる事である。 即ち(B)及び(C)は(al-alk)=O線の上部にあるに拘らず(A)はその下 部に位置を占めるものである。(A)の分析に於いてアルカリ中特に曹達に 富む事は、本岩が藍閃石、エヂリン輝石及び曹長石の如き曹達に富む造岩礦 物を稍々多量に含む事を意味するもので、園に於いて(A)の示す位置が上記礦物の占めるフィールドの略々中間に位することは、明かにこの 關係を示すものである。即ち本岩はその化學成分並びに礦物成分より見て U. Grubenmann の所謂「アルカリ片麻岩」の一種と見るべきであつて、この種の岩石に就いては、從來本邦に於て殆ど知られたものがない樣である。

#### エヂリン輝石の成因的考察

一般に十九世紀の末期まではエヂリン(アクマイト)及びエヂリン輝石は 唯火成岩中にのみ産出するものと考へられて居たものであつて、例へば當 時 F. Zirkel の如きはこれ等の礦物が結晶片岩中には發見されて居ない事 を明記し、又 C. Hintze もこれ等の礦物はエレオライト 閃長岩、曹達に富 む閃長岩或は花崗岩の如き火成岩中にのみ産出するものと限定して居た。

然るにこれと前後してエヂリン或はこれに關係ある輝石の産出する範圍は漸次明かにされて來た。即ち C. Palache (は墺國の) Gloggnitzer Berg のグラニュライト中にエヂリンを發見し、引きつゞき M. A. Lacroix は希臘の Polycandros の石灰質片岩中にアクマイトの存在を認むるに至りこれ等の礦物が變質岩中にも産出する事が判明して來た。その後世界各地に類似の岩石が漸次發見されて來たがその存在は他の片岩に比して依然極めて稀なものである。

環太平洋の區域に於いてこの種の岩石として從來知られて居るものはジャバ及び南カリフォルニア産のものである。G. Niethammer に依れば、ジャバ産のものはエヂリン珪岩で、Loh Kidang と Karang Samboeng 間に

<sup>1)</sup> U. Grubenmann, Die kristallinen Schiefer. 2 Auf. (1901) 230 頁

<sup>2)</sup> F. Zirkel, Lehrbuch der Petrographie. 2 Auf. I Leipzig (1893) 293 H

<sup>3)</sup> C. Hintze, Handbuch der Mineralogie. Leipzig (1897) 1129 頁

<sup>4)</sup> C. Palache, Neues Jahrbuch 1. (1895) 100 頁

<sup>5)</sup> M. A. Lacroix, Compte Rendu, 124 (1897), 628 頁

<sup>6)</sup> G. Niethammer, Min. Petr. Mitt. (1909), 205 頁

従來發見された各地のエヂリン族の輝石を含む變質岩を通覽するのに,一般に,火成岩の場合と同樣に,リーベカイト又はアルフヴュドゾナイト等の曹達角閃石類と共伴する例が多いのに對し,上記の環太平洋區域の三産地のもの及び前述の希臘産のものが,いづれも藍閃石と共に産出する事は注意すべきである。乃ちエヂリンは他の輝石と同樣に,一般に比較的變質程度の高い場合の産物であるが,これが比較的低度の變質作用に伴は礼易い藍閃石と共伴する事に對しては變質過程を推定する上に特別の解釋を必要とするものであらう。

述べつ、ある天鹽産の岩石中に於いても、エヂリン輝石と 藍閃石とは 成 因上密接な關係に在るものとは信ぜられるが、顯微鏡下に檢し 得た 範圍に 於いては、兩礦物間の漸移的變化その他の關係に就いて、未だ明かな材料を 認むる事が出來ない。

**擱筆するに當り**研究のため本岩礫を供せられたる矢部教授に 感謝の意を表する ものである。

(附言) 筆者は本年夏天鹽國雨龍川流域に養達して居る結晶片岩區域に於いて可成廣き範圍に亘つて分布して居る藍閃石片岩頬の露出を發見する事を得た。同岩類に關しては研究中であるが、同地に於いては小平臺川中の礫として産出するものに頼似の岩石を初め、その他酸性、擅基性を通じ多種の含葉閃石結晶片岩を産出し極めて興味深きものである。

A. O.Woodfood, Bull. Depart. Geol. Sci. Univ. Califoria, Vol. 15- No.7 (1925) 197 頁

<sup>2)</sup> M. A. Lacroix. 1. c.

# 三宅島及び樽前岳産灰長石研究補遺

理學士渡邊新六

三宅島産及び樽前岳産灰長石につきては既に數多の詳細なる研究ありただその累帶構造上のことにつきては記述未だ充分ならざるもの、如し。神津教授は此の點を更に明ならしめんと欲し、筆者をして此等兩産地の灰長石につき特にその累帶構造上に注意して觀察せしめたり。既に報告せられたる諸事實は總てこれを省略し、1,2の點を簡單に報告するにといむべし。

三宅島産灰長石 鏡下にて全く累帶構造を認めざるものを普通とすれども (第一圖参照) 時に數十條の密なる累帶を示すものあり(第二圖参照)。累 帶構造を呈する結晶と然らざるものとが如何なる場合に出づるかは未だ明 ならず。但し橄欖石を多量に含む場合に本構造を呈する者を産する傾向あ るが如し。(第三圖參照)

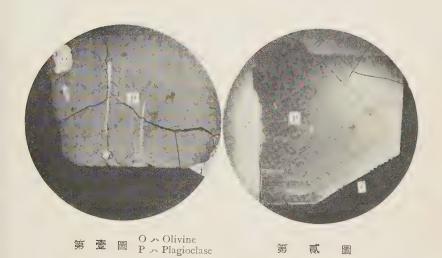
累帶構造を呈する結晶の (001) 又は (010) 上に於ける消光角を以て,その成分を推定せしに,僅に 1~3% An の成分差異ある二帶が交互に相累なれるものにして,即ち約96% An と 95~93% An との二帶の密なる交互累帶なり。但し最外部に於けるものは相當に成分の差あり (第四圖參照),極めて狭き帶の中にて殆んど連續的に而も急激に約93% An より約64% An まで變化す。この間,累帶の逆序になれるものは認められざるもの、如けれども,未だ觀察充分ならず。

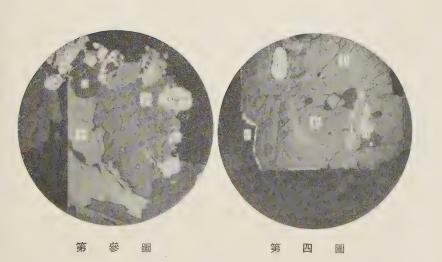
神津俶祐 地球 第7卷,440.昭2.

神津俶祐 地球 第9卷,247.昭3.

Y. Kikuchi, Journ. College. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Vol. II. Part 1, 17, 1888.
 S. Kôzu, Sci. Rep. Tôhoku Imp. Univ. II. Vol. 2. No. 1, 7, 1914.
 神津俶祐, 門倉三能 地球, 第7券, 378, 图 2.

<sup>2)</sup> 神津俶祐地質調查所報告,第15號,37,55.明42.神津俶祐地質學雜誌,第17卷,1,49,85,127.明43.





機前岳産灰長石 樽前岳産灰長石にては、神津教授の既に述べられたるが如く、累帶構造を有するもの寧ろ普通なるものゝ如く、其の外部には薄き「ラブラドリット」附近の成分の外皮を有すとは亦既に神津教授の述べられし所にして、筆者今回の測定に於てもこの灰長石の外皮をなせる 狭き 帶に於ては、その消光角より推定するに、約90% Anより約60~50% Anまで極めて急激に變化す。その變化の模様はほゞ Anに富みるものより Ab多き方に移れども、中に往々部分的に逆序の累帶をなすものも存せり。其他の結晶の大部分に重れる密なる累帶は三宅島のものと同様に、鏡下にて 明瞭にその累帶狀を見得れども、その成分上の差異は極めて尠く、(001) 上に於ける消光角の相違も漸く 1°に達するに過ぎず、約96% Anと約92~94% Anとの2帶の交互累帶をなせるものなり。

神津教授が三宅島産灰長石の性質よりその噴出の機構に及ばれし議論には本島産灰長石には他の火山岩中の斜長石に普通に見る如き累帶構造を認められざることを、その根據の1とせられしも、上述せるが如きその成分差異 1~3% An に過ぎざるものの交互累帶の如きもの、存否は 神津教授のこの所論の上には何等の影響をも與へざるものと信ず。

捌筆にあたりて、神津教授の御懇篤なる御指導に對して深謝の意を表す。

# 駒ケ岳新噴出岩中に於ける硬石膏

理學士吉木文平

駒ヶ岳火山の爆發に伴ひて噴出せる新抛出岩中には種々の異れる包裹岩あり、その一は今回新に發見せる硬石膏を含む排獲岩なり。

硬石膏は水成のものとして多量岩鹽層中に産出するは周知の所にして、 父後火山作用 (Post-volcanic action) によるものは 石膏礦床中に屢々發見 せらる。前者の海水或は類似鹽類の共存する溶液より生成する條件に就い ては Van't Hoffの有名なる研究あり、又後者の石膏礦床に伴ひて産する例 は本邦に於ては花岡 及び加納礦田 に於て知られ、所謂黑礦々床中に存す る石膏塊の核心をなして産す。

火山噴出物中に硬石膏の發見せられし例は 比較的稀に屬し, 个 其例を索むるに Fouque の記載に據れば 1866 年サントリン火山の爆發に際して噴出せる熔岩中には石灰岩に 由來せる包裹物を含み, 其中に 双晶をなせる硬石膏結晶を含有せり。又 1872年のヴェスビヤス 火山熔岩中には 0.5 m 大の蠻岩塊が發見され, 其熔融部には黑雲阜, 燐灰石及び 灰長石と共に 5 mmに達する硬石膏結晶を發見せる Scocchi の報告あり。

駒ヶ岳火山の包裹物中に記載せんとする硬石膏も亦火山作用の一成生物 に屬し、その産財並に成因上に興味ある一資料を加ぶるものなるべし。通常 便石膏の成因は水溶液よりの晶出或は低温度の熱水作用による成生物とせ らる、も、駒ヶ岳産硬石膏は恐らく高温成生の一例と考へらる、ものなり。

# 含硬石膏包裹岩の顯微鏡的觀察

便石膏を含有する包裹岩には其岩質上三種あり。第一は完晶質石基を有する兩輝石・石英安山岩,第二はマイクロ・ノーライト,第三は輝緑岩質の排獲岩にして,以下これらの岩石學的性質及び硬石膏の發達狀態に就いて記せんとす。

Van't Hoff, Untersuchung über die Bildungsverhältnis der Ozeanischen Salzablagerungen, 1912.

K. Sugawara, On the accurrence of anhydrite in the Hanaoka mine, Ugo Prov., M. S.
 K. Kinoshita, Sci. Rep. Tohoku lmp. Univ., Series III, 1, 203~217, 1923.

<sup>3)</sup> 木下龜城, 地質學雜誌, 32, 337~348, 大正 14年。

<sup>4)</sup> F. Fouqué, Bull. Soc. Fr. Min., 13, 245, 1890.

<sup>5)</sup> A. E. Scocchi, R. Accademia di Napali, Atti. 1883, i. (Z. Krist., 14, 523, 1888).

柱狀のもの見受けらる、も大概は肉叉狀を呈し斜長石の間隙に介在す。劈開片に就き測定せる屈折率は  $\alpha'=1.702$ ,  $\gamma=1.710$  にして,多色性はX... 淡褐綠色,Z... 無色或は淡緑色なり。黑雲母には二様の狀態あり,一は暗褐色を呈して母岩中に局部的密生し,他は 微細なる 鱗片狀をなして菫青石中に含有せらる、ものなり。最も大なる結晶に就て見るに光軸角は殆んど零度に近く,多色性は强烈なり。

重青石は母岩のみならず、脈狀部への移化する部分には特に多量に存在 す。大さ0.1~0.4 mmの丸味を帶べる粒狀結晶をなす。包裹物として多量 の黑雲母の外に粒狀磁硫鐵礦及び少量の斜長石を見る。薄片に於ては多色



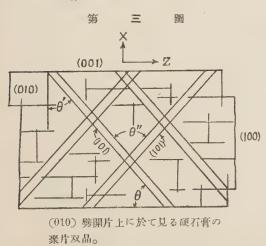
ノーライト質母岩と硬石膏脈との境界附近を示す (×35) A 硬 石 膏, C 堇 青 石, P 磁硫鐵礦 Hy紫蘇輝石, Pl 斜 長 石, Gp 石 膏.

性は鮮明ならず。浸液法により屈折率を測定せるに  $\alpha'=1.534$ ,  $\gamma'=1.542$  を得たり。

次に母岩部を買ける裂隙充填部に就て述べん。この部分は巾約3~7mmの脈狀をなし母岩とは稍々明かに境界を存す。今其境界附近の移化狀態を

見るに第二圖に示すが如く、母岩に接近して多量の重青石發達し、次第に磁 硫磁礦及び硬石膏となる。 重青石の多き部分には紫蘇輝石亦少からず。 磁 硫鐵礦は 特に結晶形を示さずして多量發達し、微粒狀のものは 母岩中にも 散點せり。反射顯微鏡により 檢するに 特有の青銅色を放ち、少量磁鐵礦微 晶を変ゆ。

硬石膏 裂隙充塡部に糖狀の集合をなせる硬石膏を鏡下に檢するに 0.5~ 1.5 mm 大の不規則なる形狀の結晶より成る。往々母岩に屬する部分に稍大なる硬石膏結晶が多量の粒狀斜長石の間を充して發達し oikocryst を形成せるものあり。これらの硬石膏には 劈開一般に よく發達し,薄片に於ては略直交せる劈開線を有する結晶少からず。即ち劈開は (001), (010) 及び(100) の三面に存在し,特に (001) に平行のもの最も完全なり。屢々劈開に沿ひ二次的に繊維狀石膏の生じたる部分あり。



本結晶を粉末とな し鏡下に觀察するに 各粉末片は正しく矩 形狀劈開片をなすも の多く、かいるもの に於ては各邊に對し 直消光を呈す。双晶 は極めて普通にして 單双晶並に聚片双晶 の兩者あり。いづれ

も (101) 面を双晶面となすを 以て (010) に平行なる 劈開片上に 於ては 第 三圖に示すが如き角度を以て双晶鬱面の現はる、を常とす。今 (010) 面上 に於て劈開線の方向と双晶面とのなす角を測定し,他方 Hessenberg に據れる硬石膏の軸率 a:b:c=0.8933:1:1.0008を用ひ,(101)と結晶軸となす

第一表

	測定值	計算值
0	47.70	48°14′
6'	42.00	41°46′
6"	95.70	96°28′

角度を算出せしに其結果は第一表に見るが 如くよく一致せり。

本便石膏の光軸面は (010) に平行し,且 鋭等分線 Z は (100) に垂直にして 光學符 號は正なり。從て光學位は a/Z, b/y.

c/X なり。今浸液法により種々の方向の劈開片を選びて主屈折率を測定せしに次の値を得たり。

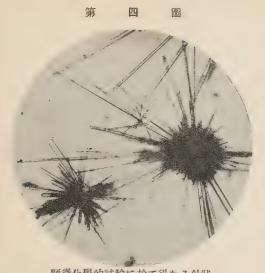
$$\begin{cases} \alpha = 1.572 \\ \beta = 1.577 \\ \gamma = 1.613 \end{cases} \quad \gamma - \alpha = 0.041$$

複屈折の極めて强きは亦硬石膏の一特徴なり。上記の結晶學的並に光學的性質は硬石膏なるを決定するに充分なれども,更に顯微化學的試驗(microchemical test) を試みたり。

顯微化學的實驗 岩石中に含まる、硬石膏の迅速なる一撿出法としてBerg の方法あり。該法は薄片用硝子の上に少量の試料粉末を置き,數滴の鹽酸を滴下して 硬石膏を 溶解 せしめ,更に少量の水を注加して 稀釋後 之を徐々に蒸發せしむる時,晶出する針狀或は星狀の結晶によりて判定 するものなり。之に做ひ駒ヶ岳產試料につき,實驗せるに 容易に第四圖の 如き針狀結晶の 放射狀集合物を得たり。この結晶を鏡下に 檢するに屈折率甚だ低く(n=1.523),且複屈折亦著しく弱し。各針狀晶は 主軸の方向に 平行なる双晶をなし,双晶面に對し,消光角 c∧X′=37°の對稱的斜消光を呈す。これら

<sup>1)</sup> Hessenberg, Dana's System of Mineralogy 910, 1909.

<sup>2)</sup> G. Berg, Centbl. Min. Geol., 688~690, 1907.



顯微化學的試驗に於て得たる針狀 石膏の聚合体を示す (×42)

の性質より見るに新に 品出せる針狀晶は石膏 なるを知れり。次に比較 實驗のため 神津教授の 御厚意により 惠與 せら れたる花岡礦山産 硬石 膏に就き同様の實驗を 繰返したるに全く同一 の結果を得たるを以て、 駒ケ岳産試料も 亦硬石 膏なるを確認せり。

# 研究短報文

# ミアスク産鐵雲母の化學成分

理學士 鶴見志津夫

囊きに余は神津教授と共に石川産鐡雲母及六連島産アノマイト式黑雲母の研究に從事し、その研究の結果は既に本誌上に發表せる所なり。

旣に記せるが如く、黑雲母族(Biotite group)は他の雲母族即ち Muscovite group 及 Phlogopite group に比して未だ化學上及 N線上の研究に充分なる結果を得るに至らず。從つてその分子式も合理的に推考するを得ざるなり。殊に Biotite group 中鐵雲母 (Lepidomelane) はその物理的性質の研

<sup>1)</sup> 神津, 鶴見, 岩石礦物礦床學 2, 211, 昭和 4年, 5,155, 昭和 6年。

究困難なるを以て,他の雲母種に比して一層不明の點尠からず。

余は旣に發表せる六連島産アノマイトの化學分析を行へる際又ウラルの

	第		表	
	1	2	-3.	4
SiO <sub>2</sub>	33.27	33.07	33-42	33-32
Al <sup>v</sup> O <sub>3</sub>	12.78	16.32	12.22	17-44
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	11.84	5.97	9.41	19.15
FeO	18.05	22.46	21.83	7.89
' MgO	6.51	5.85	6.84	3.86
CaO	0.14	0.26	*****	0.05
Na <sub>2</sub> O	0.74	0.87	1.02	0.42
$K_2O$	7.39	7.92	7-86	7.19
H <sub>2</sub> O-	1.62			3.99
H <sub>2</sub> O÷	4.24	3.87	4.32	5.19
MnO	0.93	*****	0.72	0.34
${ m TiO}_2$	2.84	3.84	3.14	1.27
Total	100-35	100-43	100.78	100-11

- 1 Miask, Ural 產, 鶴見分析, 2 Miask, Ural 產, Kunitz 分析
- 3 Brevik, Norway 產, Kunitz 分析, 4 石川產, 鶴見分析

ミアスク産鐵雲母に就て化學分析を行へり。その結果は第一表に記するが如く,K. Kunitz のミアスク産鐵雲母に就て分析を行へるものと近似すれども, $\mathrm{Al_2O_3}$ , $\mathrm{Fe_2O_3}$  及  $\mathrm{FeO}$  に於て相當に異なれる關係を示せり。又石川産鐵雲母と比較するに前記 3 つの酸化成分のみならず, $\mathrm{MgO}$  に於ても相當に異なれり。

如斯き化學成分を有する鐵雲母が果して如何なる化學分子を構成し得る かを判定するには未だ適當なる資料を得るに至らざるを以て,更に後日論 述し得る機を待たんとす。

終に臨み懇篤なる御教示を賜はりし神津教授に深甚なる謝意を表するものなり。

<sup>1)</sup> 神津,高根,岩石礦物礦床學 5,205,昭和6年。

<sup>2)</sup> K. Kunitz, N. J. B. B. 50, 413, 1924<sub>o</sub>

# 評論及雜錄

# 結晶内の構造群につきて

理學士高根勝利

#### I. 結晶体の概念と化學成分の意義

周知の如く岩鹽の結晶は等軸晶系に結晶し、その結晶構造研究の結果、一 邊の長さ 5.628 A なる單位立方體の中に 4 NaCl を含み、Na は立方體の各 隅と各面の中心とに、Clは立方體の中心と各稜の中心とに位置せり。かく の如き構造が三次元的に反覆し發展して岩鹽の大なる結晶をなす。この結 晶中にてNaのみに着目して考ふれば面中心立方格子をなし、Clのみに着 せば亦面中心立方格子を構成するを知る。この二種の面中心格子が〔111〕 の方向に、單位立方體の體對角線上にその長さの 1/2 丈互にづれて組合へ るものは、NaCl型格子をなす。Naを考ふればそれを中心として G Clにて 八面體的に圍まれ、Cl を考ふるも 亦それを中心として八面體を形成 する 6 Na によりて聞まれ,所謂配位構造をなせり。かくて 從來考へたるが如き NaCl 分子なるものは結晶體中にては實在せざるを知れり。故に物質の固 態の狀態. 即ち結晶を取扱ふに當りては, 分子なるものは一般には考へ能は ざるなり, 所謂分子式或は化學式と呼ぶものは, 單に結晶中に無數に存在す る元素原子數の比としての意義を有するに留まれり。複雑なる鹽額、特に 珪酸鹽等に於ては從來考へられたるが如き分子なるものは全然存在せざる ことが最近の結晶構造研究の結果明にさるるに至れり。然りと雖も結晶を 構成する迄の化學反應を理解し、或は同形混合物の物理性や,平衡の問題を

より簡單なる成分の函数として理解し易からしむる為めに,殊に結晶に於ける珪酸鹽分子なるものを假想して珪酸鹽の結晶生成を理解し易からしむるが如きは敢て差支なかるべし。例へば $SiO_2$ なる簡單なる式にて表し得る珪酸は多くの多形を有す,就中 $\beta$ -Quartz, $\beta$ -Tridymite, $\beta$ -Cristobolite はその結晶構造明にせられたり,何れの結晶に於ても $SiO_4$ なる $Si^{+4}$ を中心とする $4O^{-2}$ イオンの四面體的配位結合がその共通の單位となり,それらが靜電電子價を平衡する如く結合す,その結合樣式の差異によりて 珪酸の凡ての型否珪酸鹽の凡ての型を生ずるに至れり。かくの如く化學式は簡單なるも,その結合の狀態は甚だしく複雜にして $SiO_2$ なる分子は考ふる能はず,只全體として無數に存在する原子のSi:O比が1:2を保てり。故に結晶體を取扱ふに當りては普通の分子化學は甚だしく無力にして,結晶體に於ける各種の問題に有力なる補けとなるはWerner の配位化學なり,殊に V. M. Goldschmidt 及その學從によりて現代化され,深められつつある結晶化學は,その名に示さる如く,全く結晶體自身の化學と言ふべし。

#### II. 結晶中の Atom-Ion 及構造群につきて

研究の結果鹽類結晶の大部分即ち化學上極性化合物に屬するものは、水溶液としてはイオンに解離し、蒸發しては固態となりてイオン格子を形成す、即ち前述のNaCl結晶に於てはNa<sup>+</sup>イオンとCl イオンとが格子構造をなせり。之等イオンは夫々獨自の作用圏を有し、互に相引き相反接して結晶體としての平衡を保てり、故に結晶は之等の作用圏にて置換したる球狀體の積み重ねなりと考ふるを得可く、かくて結晶に純幾何學的法則を適用してその構造の狀態を論ずるを得べし。之等の幾何學的問題のみを專ら取扱へるものにP. Niggli 及びその學徒あり。經驗によりてEragg は之等のイオン或は原子半徑は第一次近似として同一荷電の下にては異れる結晶中にても大體同一半徑を有すと考へたり。又研究の結果、不活性瓦斯樣の

設電子配置を有する原子或はイオンは之を全くの球と考へ得ることが明となれり。されば結晶例へば AX なる化合物につきて考ふるに、異種イオン間の巨離 A-X、と共に陰イオン間巨離,殊にしばしば大半徑を有するものに於て、X-X が重要なる役目を演ず。之れ等のイオンは外接せる球と考へ得るを以つて、イオン間隔は即ちイオン半徑の和を意味す。例へば Mg 及び Mn の酸化物硫化物、セレン化物をとりて考ふるにその結晶中の陽イオン及陰イオン間巨離 A-X の間には次の關係あり。

# 第一表

	A – X		A · X
MgO	2.10Å	Mn()	2·24Å
MgS	2.60	MnS	2·59
MgSe	2.73	MnSe	2·73

この表につきて見るに酸化物にては A-X の値に差異あるも, 硫化物 及セレン化物にては Mg 及 Mn の半徑に差異あるにかかわらず, A-Xの値には何等の差異を認むる

を得ず、即ち陰イォンは密に相接して存在しその配位の中心に金屬イオンありて、 $O^{-2}$  イオンはその半徑他の二者に比しては小なるを以つてその配位の間隙に金屬イオンを全く含ましむるに至らずして、陽イオンの半徑の影響は A-X 巨離に現はるるも、硫化物及セレン化物にては陰イオンの半徑大にして金屬イオンをその配位の間隙に全く含ましむるに至り、陰イオン間隔のみが現れたる結果なり。陰イオンが密接せりとの假定の下に計算せば  $S^{-2}$ に對し 1.837Å、 $Se^{-2}$ に對して 1.930 Å なる半徑値を得て他の化合物につきて求めたるものとよく一致す。しかりと雖も配位構造をなす結晶に於て最も 决定的なる役割を演ずるものはイオンを関む他のイオンの數、即ち配位數にして、既に述べたる如く結晶は密に相接する 球の 積み重ねなるを以て、配位數はその半徑比  $R_A$ :  $R_X$  にて表すを得。X 関が A 関を圍繞する如く配位せる時の X の數の最大値と  $R_A$ :  $R_A$  値の存在域とは理論的に次表の如し。

 $AX_2$  なる化學式にて表し得らるる化合物に於て 6 なる配位數 (A が Xに對しては 3) を有する 金紅石型構造 2 と,2 なる配位數 2 なる配位数 3 との 4 を有する 登石型構造 4 との 4 との 4 との 4 を有する 登石型構造 4 との 4 との

Janks .	Name of Street	refer
第		表
577	-	-2.5

Xの最大數	X の 配 位	R <sub>A</sub> :R <sub>V</sub> の存在域
2	對 蹠 的	*****
3	正三角形の隅	0.15 - 0.23
4	正四面体の隅	0.23 - 0.41
4	正方形の隅	0.41 - 0.73
6	正八面体の隅	0.41 - 0.73
8	正六面体の隅	0.73 - 1.00
12	菱形十二面体の面の中心	1.00-

べからず。 $AX_2$  なる 各種の化合物中 この兩構造を 呈するものと  $R_A:R_X$  比とを掲ぐれば次表の如し。

第三表

金紅石型構造(配位數3及6)

	MgF <sub>2</sub>	NiF <sub>2</sub>	CoF <sub>2</sub>	FeF <sub>2</sub>	ZnF <sub>2</sub>	MnF <sub>2</sub>
$R_{\mathbf{A}}:R_{\mathbf{X}}$	0.59	0.59	0.62	0.62	0.62	0.68
-	MnO <sub>2</sub>	VO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	${ m RuO}_2$	IrO <sub>2</sub>	OsO <sub>2</sub>
$R_A:R_X$	0.39	0.46	0.48	0.49	0.50	0.51
	MoO <sub>2</sub>	WO <sub>2</sub>	NbO <sub>2</sub>	SnO <sub>2</sub>	PbO <sub>2</sub>	TlO <sub>2</sub>
$R_A:R_X$	0.52	0.52	0.52	0 56	0.64	0.67

螢 石 型 構 造 (配位數4及8)

	$CdF_2$	CaF 2	HgF 2	SrF <sub>2</sub>	$PbF_2$	$\operatorname{BaF}_2$
$R_A:R_X$	0.77	0.80	0.84	0.95	0.99	1.08
	ZrO <sub>2</sub>	PrO <sub>2</sub>	CeO <sub>2</sub>	UO <sub>2</sub>	$ThO_2$	
$R_A:R_X$	0.66	0.76	0.77	0.80	0.84	

この表より明なるが如く配位數3,6なる金紅石型構造と4,8なる螢石型構造との半徑比の限界値は、理論の要求せる如く、約0.70にあり。R<sub>A</sub>:R<sub>X</sub>値が結晶構造に對して如何に決定的なるかを知るに充分なり。イオン半徑は配位數によりて幾分變化す。

イオンは帶電せるを以つて電場にもたらさるる時偏極を起し、從つて其 大さを變化す,而して半徑の大なる イオン 程偏極し易し。結晶體にありて は多くの場合半徑の比較的小なる陽イオンの周りに陰イオンが配位して密 に相接し且つ成るべく配位數を大ならしむる如き傾向あり,即ち配位に際 しての位置エネルギーを最小ならしむる配置をとる。この場合偏極を起さ しむるものは陽イオン,殊に電荷の高き陽イオンにして,偏極するものは陰 イオン, 特に半徑の大なる イオン はその偏極度も從つて大なり。偏極の結 果は結晶構造の變化或は更に淮みて對稱の低下を來さした。偏極を起さし むる力は同一荷電を有する 陽イオンにありては, 半徑 の小なるもの程大な り。例へば一價のアルカリ族にては Li は Cs の四倍丈の力を 及ぼし, 二價 のアルカリ土族にては Be は Ba の 16 倍なり。特に面白きは偏極せしむる 力の大なる陽イオンと强く偏極する陰イオンとが結合する場合なり。この 際にはその A-X 巨離が非常に接近し, 遂に NH<sub>4</sub>, SO<sub>4</sub>, SiO<sub>4</sub>, PO<sub>4</sub>, Cl )<sub>4</sub>, SO<sub>2</sub>, ClO<sub>3</sub>, NO<sub>3</sub>, CO<sub>3</sub> 等の如く結晶内に於て宛も複雑なる一のイオンの 如く動作し,構造上の單位を形成するに至る,かくの如き群中にては陽イオ ンは陰イオンに圍繞さる。かいるものを P. Niggli に從つて"Baugruppe" 構造群と呼ぶ。旣に述べたる如く AX2 なる化合物にて 4 及 8 なる配位數 を有する營石構造にては KA: Rxの限界値は 0.7 にして, 一のイオンの替り に構造群を置換して0.7以上の比率を保たしむる時,人工的に螢石型構造を とらしむるを得る理なり。次に掲げたる化合物にては Cl , Br . L . K , (NH<sub>4</sub>) 等の大半徑 1 オンに對して [Ni (NH<sub>3</sub>)<sub>5</sub>] +2, (PtCl<sub>6</sub>) +2, (Sn

 $Cl_6$ ) $^{+2}$ ,  $(SiF_6)^{+2}$ 等の大半徑を有する構造群を宛も一のイオンの如 く結合せしめ、上記の比率を保たしめて營石型構造をとらしめたり。

偏極の結果二つのイオン距離が減少し、遂に原子半徑の和に等しきか或

#### 第 四 表

化合物	a	化合物	a
$K_2(\text{PtCl}_6)$ $(\text{NH}_4)_2(\text{PtCl}_6)$ $(\text{NH}_4)_2(\text{SnCl}_6)$	9.7Å 9.84 10.05	(Ni(NH <sub>3</sub> ) <sub>6</sub> )Cl <sub>2</sub> (Ni(NH <sub>3</sub> ) <sub>6</sub> Br) <sub>2</sub> (Ni(NH <sub>3</sub> ) <sub>6</sub> )J <sub>2</sub>	10.09Å 10.48 11.01
$(NH_4)_3(SiF_6)$	8.38	Ç-14(21148)6) <b>3</b> 2	12.02

はそれより小となる時には、陰イオンの有する過剰の電子は陽イオンに奥へられて、遂に中和の狀態となり、イオン格子の特性を失ひ、原子格子或は分子格子を形成するに至る。 Zincblende 型及 Wurtzite 型の構造を有する化合物は原子格子に屬する著しき例にして、化學上非極性化合物に屬す。 Zincblende ZnS にては Zn-S の實測値は 2.35% にして、イオン半徑和は  $R_{zn}^{+2}+R_{z}^{-2}=0.83\text{ Å}+1.74\text{ Å}+=2.57\text{ Å}$ ,原子半徑和は  $R_{zn}+R_{z}=1.33+1.04=2.37\text{ Å}$  なり、以つて上述の意味を理解し得るなるべし。

#### 前號正誤

本誌第6卷6號	中次の通り修正す。	
頁 行	誤	Æ
264下より 5	·····速度······	…等速度
265 "	··· 第一圖は(A)を	第一圖 I,, II 及び III は何れ
		\$(A) &
265 "	4 曲線	…3 曲線
265	之より低く	…之より少し低く
266 …上より12	?·····等 Grahmann ····	Grahmann 🅸
267 9	····溫度は 1177°C .	·· 溫度は 1182℃ と1172°C, 故
		にその平均温度は1177°C
267 下より 9	)圖中	…第一圖中
268上より 5	····硫酸礦物	… 硫酸 據確 物
272第四表…	イオン牛徑	…イオン半徑比

# 抄錄

# 礦物學及結晶學

**2203**, 本邦奎新礦物 Nagatelite に關する新考察 Machatschki, F.

飯盛里安、吉村恂、畑普氏等の研究せるNagatalite(本誌第5卷第5號本欄 1427項參照)に就て、彼等は化學分析の取扱に關して結晶体を分子化學のみにて解釋せる為め、本礦の結晶化學的重要性を解すること能はざりき。筆者は彼の豫期せる如くSiO4かPO4にて置換され居る好例なりとして、新興の結晶化學にて處理せり。SiO4群をPO4群にて置換し、又三價の稀土類は之とその大きの略相等しき(な<sup>+2</sup>を置換せり(陽イオンX群)となし、イオン半徑の小なる二價イオン及4價のTiをAI及Feと一緒に陽イオン群YとしてEpidot-Orthite群に

X<sub>2</sub>Y<sub>2</sub>Z<sub>3</sub>(O,OH)<sub>13</sub>

なる化學式を與へZはSi, P, を表せり。Nagatelite をこの樣に處理する時,  $X_2Y_3$   $z_3(O,OH,F)_{13}$ にて表され,  $SiO_4$  が $PO_4$  にて置換せらるること知らる。その命名には 考慮の 餘地ありしには あらざるかと。(Cb. Min. A, 343~347, 1931).[高根] 2204, Milarite 中の Be の存在について Palache, Ch.

Adularia との分離困難なる本礦を顯微 鏡下にて分ち、日つ分光分析せるに、多量 のBeの存在を認め、之を化學分析に付せ るに5%以上のBeを得,從來の分析に てはBeOは皆 $AI_2O_3$ 中に混じゐたることを知れり。之を實驗式に示せば

 $K_2Ca_4(Be_4Al_2Si_{24})O_6)+H_2O$ となり、 $H_2O$ は分離して Machatschki の所謂長石型とよく一致せり、而して Be 及 Al が Si を置換する例 なるを知れり、Petalite は  $Li_6Al_6Si_{20}O_{60}$  なるを以て、この二礦物が結晶構造上類似せるものなることを暗示せり。(Amer. Min. 16, 469~470; 1931)[高根]

2205, Norway, Kabuland 産 Blomstrandin Bjorlykke, H.

Norway, Kabuland の長石採集場に約500 k.g の Blomstrandin を産せり。該 礦物は黑色半金屬光澤をなし葉片狀をな して Xenotime, orthite, 長石,石英,黑雲 母と共に母岩の空隙中に見出さる。晶形 の明かなるものは 稀にして, 概ね 非晶質 の如くなれども, 稀に偏光々線に感じて 複風折を呈するものあり。分析の結果は 次の如し。

Nb<sub>2</sub>O<sub>5</sub>+Ta<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 19.11, TiO<sub>2</sub> 31.48 UO<sub>2</sub> 3.78, ThO<sub>2</sub> 1.46, 稀土 35.16, FeO 4.30, MgO 0.38; CaO 0.88, ig. los. 3.70 此の中稀土の分光 X-線分析によりて認 めらる \ ものは Yt; Th; Hf; Cp; Yb; Tu; Er; Dy; Tb; Gd; Sm; Nd 等なり。尚スペ クトル線の 濃度によれば Nb-Ta 中 Ta<sub>2</sub> O<sub>5</sub> の景は約5%程度のものの如し。 (Nor. Ges, Trd., 11, 232~239, 1930).

〔加藤〕

2206, Gröba-Typus の Syenit 中の長石 Mantuani. L. D

Fedorow 法に依り Gröba-Typus Syenit 中の光軸角,及び電屈折小なる 長石を研 究し, Anorthoklas なることを知れり。そ の光學恒敏は次の如し。

2V= $-56^{\circ}$ , Ng-Np=0.0042**~**0.0054, (010)上の消光角は $4^{\circ}$ にして,(001)上にては $3^{\circ}$ なり。

K, Na 成分の比は79:21

この岩石中に含まる \ 斜長石の成分は 37~44% An のものにして, 累帶構造 あるものにては 29% An の帶も認められたり。 (M. P. Mit. 41, 272~307, 1931.) (渡邊新)

# 2207, Zonenmethode に依る斜長石 成分の決定 Ebert, H.

前に Rittmann の考案せる經緯鏡台に 依る Zonenmethode (Schweizer M. P. M 9, 1~46, 1929) を改良せるものにして 此の編には (010) を雙晶の接合面とせる 斜長石の 0~40 % An なる成分のものよ 雙晶標式と共に其の成分をも決定する方 法を掲げたり。(M. P. M. 428~26, 1931.) 〔渡邊新〕

### 2208, 人工 Hydrargillite の熱膨脹 本欄 2237 参照

# **2209**, 智利硝石の成因に就て Hofseth, B.

智利硝石パムパは海岸山脈の麓にあるフムボルト潮流中にて造られたる窒素物質即ちグワ、の日々の風による運搬と、アンデス山脈よりの遊氣流による火山瓦斯の運搬等によりその構成物質を供給せられ、此風は同時に 岩石の風化從つて 曹達の供給を助長し、斯くて 生ぜる 硝酸鹽礦床は更に水の作業により部分的に今日の

經濟的礦床を作れりと言ふ。著者の計算によれば 平均秒速 5 米 に て 1 ヶ年 2000時間風が吹くものとすれば,極めて少量の塵埃が運搬さる 2 とするも 100,000 年にて今日の礦床を作るに可なりと言ふ。(Eng. Ming. J. 131, 467~468,1931.)

# **2210**, 礦物中の銀の簡便檢出法 Feigl, F., Leitmeier, H.

p-Dimethylaminobenzylidenrhodanin の アセトン或はアルコール溶液を試築とす る時は、微量の銀の輸出も可能にして、含 銀礦物の鑑定に傾利なり。(M. P. M, 41 188~196, 1931.) (渡邊新)

#### 2211, 顯微屈折計 Scheumann, K. H.

Scheumann の助手 Lindley の 考案によるガラスのプリズムを有する屈折計につきての記述なり。この屈折計は礦物顯微鏡に取附けられ液の屈折率を計ると共に又この液中に礦物粒をも浸け得らるべく、N1~5の間に於て相當の正確さを有するものなり。(M. P. M. 41.58~63,1931.)(渡邊新)

# 2212, 珪酸塩の溝造 Grunner, J. W.

Bragg の「珪酸鹽の結晶構造」なる論文は餘りに専門的にて平常之に慣れざる礦物學者には了解し難きを以て、それを解説する意味にて一般珪酸鹽の構造を論ぜり。大体 SiO<sub>±</sub> の結合による各種のSinO<sub>in</sub> なる群の分類をなし、各種構造の概念を述べ從來の珪酸鹽を構造式にて表すことの失敗に鑑み結晶構造を加意したる新しき構造圖式及び珪酸鹽の實驗式の各元素上にその配位数を記入する新しき

化學式の記法を提議せり。 (Amer. Min. **16**, 437~454, 1931.) [高根]

#### 2213, N2O4 結結晶構造 Vegard, L.

液体空氣に連絡せる金屬棒を Camera 中に挿入し、その周圍に豫め Camera 中に 入れたる N2O4 瓦斯の結晶を附着せし め,このものの Debye-Scherrer 寫眞を 撮り, 之を Davey-Hull の方法によつて解 析して、このものが立方晶系に 屬し 『" なる立方体心格子よりなり a=7.77Å な る單位格子中に z=6を含み、此ものの結 品構造の考察より NO2 とすることの正 しきことを知りて,21(NO2)を含むとせ リ。此重 ρ=1.94, ρcal=1,942, 反射の强 弱と化學的原子同價の考察より T5 が正 しき空間群なるを推論せり。 N:(uo)  $(\frac{1}{4}u_0), (\frac{1}{4}u), (\frac{1}{2}\frac{1}{4}), (\frac{1}{4}u_2^{-1}), (\frac{1}{2}u_2^{-1}), (\frac{1}$  $\frac{1}{4}\bar{u}$ ),  $(u+\frac{1}{2},\frac{1}{2}\frac{3}{4})$ ,  $(\frac{3}{4},u+\frac{1}{2},\frac{1}{2})$ ,  $(\frac{1}{2}, \frac{3}{4}u + \frac{1}{2}), (\frac{1}{2} - u, o, \frac{3}{4}), (\frac{3}{4}, \frac{1}{2})$ 

#### **2214**, **H**<sub>2</sub>**S** 及び **H**<sub>2</sub>**Se** の結晶構造 Vegard, L.

184, 1931.) (高根)

液体空氣に連絡せる金屬棒の周圍に豫 め Camera内に入れたる H<sub>2</sub>S,H<sub>2</sub> Se の瓦 斯を附着せしめてその Debye-Scherrer 寫真を撮り、それを Davey-Hull の方法にて解析してこれ等の結晶が立方面心格子 $\Gamma'_c$ より成り、その格子恒數は  $\mathrm{H_2S}$ 、 $\mathrm{a}=5.796\,\mathrm{\mathring{A}}$ ,  $\mathrm{H_2Se}$ ,  $\mathrm{a}=6.05$  にしてその内に大々4分子を含むことを知れり、 液 豊の比重は  $\rho(\mathrm{H_2S})=0.91$   $\rho(\mathrm{H_2Se})=2.12$ , 固体のものを z=4 として計算せるものは $\rho(\mathrm{H_2S})=1.186$ ,  $\rho(\mathrm{H_2Se})=2.240$ ,  $\mathrm{CaF_2}$  と同様な結晶型を有することを種々の推論より確められたり。その空間群は恐らく $\mathrm{CaF_2}$  と同じく  $\mathrm{O_n^3}$  或は $\mathrm{O_n^5}$  なるべし。( $\mathrm{Z}$ . Krist. 77, 23, 1931.) (高根)

#### 岩石學及火山學

#### 

噴火口を充塞 せる 熔岩は, 上昇高温瓦 斯に依りて 漸次軟化膨脹し, 遂には岩石 内部に徐々なる流動運動を起して氣泡を **生じ、こは平行構造を現はすに至る。熔** 岩は途に破壞せられ,空氣の誘導に依り より加熱せられたる瓦斯は裂罅より侵入 し, 塊片の外側を一層高温となし, 裂罅附 近に存在せる 斑晶は圓狀に熔融し, 石基 を完全に玻璃化すると 同時に, 岩石中の 五斯は擴散する 可能性を有し,製葬面附 近にては厭力は特に低く温度は特に高け れば、五斯は外部へ逃げ去り、かくて氣泡 及び萬平行構造の殆んどなき一つの外皮 を發生す。火山彈の噴出中外部の加熱は 中止され,外皮の厚さは増加す。外部よ り侵入せる冷却は温度關係の方向を逆轉 し,外皮は固結せるに核心部は尚瓦斯發

達するため外皮は破裂す。外部に向ひ流動する瓦斯は始めは深部に迄存せしこれ等の製膚を表面の方へ押し上げて之を淺くす。周絲部より結晶の新生及び舊斑晶の全治が始まり、同時に瓦斯の週期的分離起り、强く壓縮されたる形にて氣泡は同心的に排列す。 尚內部は急固結するものにあらずして、Plastische 狀態を保てる諸種現象も認められ、又氣泡瘤等を生ぜる場合もあり。(N. J. Min., B. B. 64 A. 629~647 1931) (河野)

## 2216, Odenwald 産角閃玄武岩に就きて Klemm, G.

本岩は Mitlechtener に於て角閃花崗岩 に闡繞せらるる小 Schlot として出づ、兩 者の接觸部に於ては互に兩成分の混合せ る岩石を成生せり。正規支武岩の礦物成 分は輝石, 橄欖石, 角閃石, 霞石, 長石, 黑 雲母,磁鐵礦,燃灰石,Perowskit, Spinel, 及び氣泡を充たせる沸石なり。これ等の 中角閃石は普通輝石中に包裹物叉は平行 共生をなして出で,角閃石の晶出の末期 に大部分の輝石の晶出は始まれども,輝 石斑晶の 晶出後に終り,大部分 のものは 不規則又は兩端不完全なる良柱狀晶とし て出づ。又支武岩, 角閃支武岩, 淡色破片 角閃花崗岩等の化學分析をも行び互にそ の成分を比較せり。最后に著者は支武岩 中の褐色角閃石につき, Chelius はこの角 閃石の intratellurisch なるを疑ひ角閃花 闘岩よりの Resorptionprodukt なりと考 察せる如く見ゆるも,その今日 Odenwald に於て地表に 横はれる 部分は, 玄武岩の 噴出時に於ては未だ地表に露出せざるも

のにして、その後少くとも 300~400 mの 削磨 のありしを 見逃 せしためなりと言 ひ、この 玄武岩の 角閃石は疑ひもなく intratellurisch なりと説けり。(N. J. Min. B. B. 64, A. 593~601, 1931.) 〔河野〕 2217、 鹽基性岩石熔融物の物理化學的性 質に對する溫度の影響 可見弘一、森川 静太、網川菊男

著者の一人可見弘一氏が本誌に於て逐 次公にせる所を,更に詳述せるものにし て,更にこれに英文摘要を添へたり。(電 氣試驗所研究報告,317,1~21,昭六) 〔渡邊萬〕

#### 2218, 露図 Ingulez 河地域の玄武岩 Polowinkina, J.

水岩は Ingulez 河の右岸に發達せる片 麻岩中に 小岩脈 をなし, 淡灰色, 細粒, 緻 密にして,75% An を有する bytownite 斜長石 及び 橄欖石 の 斑晶 を 有し, 斑狀 構造を有し, 石基は上述の 礦物の 微晶及 び單斜輝石, 方解石, 蛇紋石, グラス 及び 礦石の小量より成る。分析結果は SiO2 46.58, TiO<sub>2</sub> 1.22, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 14.77, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 4.52, FeO 7.44, MnO 0.20, H<sub>2</sub>O 9.08, CaO 10.70, Na 2O 1.35, K 2O 1.01 CO 2 0.71 Ig. L. 3.39 にして, 著者は此支武岩 を Issachky の輝絲岩, 及び Tachtaikaの分 岩と比較し互ひに同時代のものなりと想 像し之等の時代は Ukraine の外の結晶 質岩のものより遙かに若し。而してこの 岩脈の存在は花崗岩塊の貫入起りし后に も,火山活動は全部は終熄せざりしを示 To (Mem. Soc. Russe. Mineral. 59, 287~ 297 1930.) (瀬戸)

 2219
 東アフリカ Kenya Colony の

 流紋岩、粗面岩及響岩の分類法及び 隨伴

 せる玄武熔岩 Smith, W. C.

之等の命名法は著者等に依り異なるを 以て,著者は之を明確にせんと企てたり。 soda-rhyolite (comende type): comendite 之は Kenya colony のものと Pantelleria rock との間には著しき 類似點を示 し,次に Soda-rhyolite (Pantelleria type) Pantellerite 東アフリカには hyalo-pantellerite(Khagiar type) 及び aegirite pantellerite (Santelmo type) が發達し, 之等は Pantelleria, Gelkhamar @ Pantellerite > 基だしく類似す。 又 Soda-trachyte (Gib elé type): Gibelite 之は 斑狀網面岩にし T Washington An Pantelleria o Sodatrachyte と著しく類似す,次に Pantelleritic trachyteは東アフリカに發達し Washington は Pantelleria の Zeneti type にそ の名を用ゐたり Pantelleritic trachyte は Soda trachyte よりも石英に少しく富み、 長石は石基に確かに多く含まる。又 Katophorite-trachyte \$11 Azores o Sao Mignel に發達するが之によく 類似の岩石は Prior 氏の記述せる phonolitic trachyte 中 に見らる。 少は他の trachyte に比して CaO の量少く ZrO<sub>2</sub> の景著しく多く含 む。 更に著者は phonolite を復石の結晶 の大小並びにその中間のもの及び石理と кки Kenya type, Kapiti type, Losuguta type とに分類せり。次に Kenyte は phonolite の Kapiti type に類似し Mt. Kenya にて Gregory 氏が採集し命名せ るものにして nephelin の多くの斑晶及

anorthoclase を含む、此岩石は Kenya volcanic series の鹽基性響岩として分類 せらるべきなり。著者は最后に Kenya 地域の響岩に伴ふ玄武熔岩につきて記述せり、(Quart. J. G. Soc. 187, 212~258, 1931.) (瀬戸)

2220, 斑糲岩中に於ける鋼玉石-尖晶石-捕虜岩 Read, H. H.

英國蘇蘭士 Aberdeenshire の Haddo Hause に "Haddo mass"と稱せらるな 斑糲岩の大露出あり。著者の研究によれば該岩は橄欖石斑糲岩と norite の二種に分けらる。並に興味ある事は前者は殆ど捕鳴岩を含まざるに反し、後者に於ては頗る多きことなり。捕虜岩は多量の鋼玉石及び尖晶石を含みて、大略次の二種に分けらる。

- 1. 鋼玉石-尖品石-磁鐵礦岩
- 2. 鋼玉石-尖晶石-黑雲母-堇青石-中性長石-磁鐵礦岩

著者は之等捕虜岩に就きて記述したる後同種岩に對する世界に於ける八ヶ所の有名なる産地に就きて諸學者の記述せるものと比較對照せり。各地に産する此種捕虜岩の殆ど全部が基性岩特に norite に伴ふは注目に値すべく,從つてその成因も亦之れに關係するものなるべし。著者はその成因に關して Bowen 氏のなせる支武岩的岩漿と AI<sub>2</sub>O<sub>3</sub> に富む水成岩との反應を引用し,斯かる反應に於ては捕虜岩中には AI<sub>2</sub>O<sub>3</sub> の量を増加して珪線石等を作り,他方岩漿中に於てはその結果として輝石中に MgO の成分を増し斜長石中には灰長石成分を増して norite を

造るものとせり。而して尖晶石を含む捕 磨岩は此の 反應の途行 せられずして,途 中に拒止せられたるを示すものなりと。 (Geo. Mag., 68, 446~453, 1931.)(加藤) 2221、ペグマタイト、アプライト 及び錫 礦脈の成因關係 Derry, D. R.

北米カナダの Ontario-Manitoba の境 界附近は大部分花崗岩系の岩石によりて 構成せられ, 之れによりて貫かれたる Keewatin紀と思はるム水成岩及び火川岩 が僅かに残りて所謂標式的の "canadian precambrian shield"に屬す。著者は此 の附近に 頗るよく 發達せる 多數の pegmatiteと aplite の研究をなし, 之等と錫礦 脈とを合せてその成因關係を考究せり。 aplite と pegmatite は肉眼的にも亦顯微 鏡的にも漸變することなきはその成因に 基くものにして,恐らくは 殘渣岩漿 の結 晶作用の中途に於て"squeezing process" によりて 成生せるものにして, 前者 はそ の結晶部即ち"crystal mesh"の厭力の減 退に件ふ再融より生じ,後者はその揮發 性成分並に稀有成分を含む熔融体に由來 するものなりとす。而して "complex pegmatite"に於ける曹長石, 錫石, Lepidolite, spodumen, beryl 等の 諸礦物は皆 後の溶液による交代作用に基くものなり 即ち初め貫入せる Pegmatite の固結完了 するに先だち、稀薄溶液の循環が行はれ 為めに第一に曹長石による加里長石の交 代が行はれ,續いて 前記錫礦及 リシュー ム礦物等の交代作用となれるものなり。 而して此の中錫石は他の揮發性元素と共 に主として貫入体の上部を循還せるもの

なることは, 錫石及び 同礦脈が常に 上部 に於てのみ發見さる x 事實に微して知ら るべし。(Geol. Mag, 68, 454~475, 1931.) (加藤)

#### 2222, Granitpegmatite の地化學 Fersmann, A,

Granitpegmatit 中に集中する元素及び 礦物に就ての概觀なり。元素は原子番號 奇數の者,礦物結晶にも奇數對維の者多 き等奇數に特殊の縁あり。又多くの場合 ここに集中する礦物の種類は限られたる ものなることを示し、ペグマタイト生成 にあたりての礦物構成の法則、Phasenregel、Doppelverbindungenの法則につき て論ぜり。(M. P. M. 41, 200~213,1931.) (渡邊新)

#### **222**引,チタニウム群の化學及び地化學 Hevesy, G.

地球中のチタニウム群の元素が比較的 豊富に存する事を確めんが 爲め、總の種 類の火成岩 300 種の化學分析を行ひたり その結果は SiO<sub>2</sub> 56.35, TiO<sub>2</sub> 1.02 (T 0.61), Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 13.08, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 2.87, FeOi 4.64, MnO 0.11, MgO 8.06, CaO 5.70, Na<sub>2</sub>O 3.19, K<sub>2</sub>O 3.26, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 0.21,  $H_2O + 1.56$ ,  $H_2O - 0.06$ , Sr 0.019, Hf 0.00032, Th 0.0013, V 0.002, Nb 0.000032, Ta 0.000024なり。又 20 種の stony meteorite のチタニウムの平均値は Ti 0.19%, 11種の meteoric iron に於て は 0.04 %, eclogite shell 及 iron core を 含む全地球の Ti の量は 0.15 % に達す。 前してこの Ti は ilmenite として大部 は存すと結論さる, zirconium, hafnium, thorium 以外のものは atomic dimension 大にして,主として pegmatite に依りて 表きるゝ residual magma 中に集中して 起るものなり。(J. Chem. Soc. 1~16, 1931.) (瀬戸)

## 金屬礦床學

2224, 金屬礦石の成生ご其結合狀態に就 て Merwin, H. E.

金屬礦物の成生に當りて最も重要なる 條件のうち (1)地表より地下深くに至る 溫度の變化 (2)金屬礦物の成生と魅力の 影響 (3)金屬礦物の沈澱しついある其の phase の蒸氣壓に就で,等の諸條件を舉 げ之等につき論及する所あり。(Am. Min. 16, 93~96, 1931)〔中野〕

#### 2225,金屬礦石及び礦滓研究上に於ける X線スペクトルの應用 Noddack, W.

本年9月6日伯林市に開かれたる獨乙 採礦治金學會講演要旨にして、この方法 にて種々の含有元素の大体の多少をも知 り得べく、化學分析に於けるよりも確實 11.つ迅速に、微量の試料をも吟味し得る を以て、將來大に利用せらるべしと主張 せり。(Met u. Erz. 28, 133, 1931.) 「渡邊萬」

クロム鐵礦々床は 般に basic magma より誘導せられたる岩石中に胚胎せらる 、場合多く、橄欖岩、橄欖石頭火輝石岩、 輝岩、橄欖斑淵岩等を主なる 母岩と考へ たりしが、この Sheridan の礦床 はこれ らの type のものとは全く趣きを異にして、関線岩脈中に發見せらる」ものなり。即ち始原代片麻岩を貫通せる數個の関線岩脈ありて、この中に 礦体を包藏す。この岩脈に接したる片麻岩中には多數の石英脈ありて、時には角関石紫蘇輝石岩、片麻岩を貫通せるものありて、この角閃石、紫蘇輝石岩とクロム鐵礦閃緑岩との關係は今後次第に探求せらるべきものなり。著者はこの 関線岩を 次の二つに 區別せり。

- (1) 粗粒暗灰色の岩石にして岩脈の大部分を占め,この中に 礦体を胚胎す。
- (2) 緻密黑色の部分にして,上記の粗 粒岩脈より segregate したるものと思は れ,0.47% の Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub> を含有す。 確体は この組粒閃綠岩中にレンズ狀をなして, 最大の厚さ5呎に達し不明瞭ながらも縞 **狀構造を示す。礦石の薄片を檢すれば**, クローム鐵礦粒は角閃石及 phlogopite と 共生し,蛇紋石は一部角閃石より 變化せ しものと思はる」も、一般にクロム 鐵礦 の間隙を充塡してクロム鐵礦よりも後期 に他より運ばれたるものなるべしと考へ らる。これら多量の角閃石とクロム鐵礦 との共生せる關係より、著者は恐らくこ の確床は閃綠岩中に 於ける segregation によりて形成せられたるものなるべしと 云 So (Econ. Geol., 26, 625~629, 1931) [中野]

2228, Bolivia, Oruro 地方の銀錫礦 床に就て Lindgren, W. Abbott, A. C.

附近の地質は比較的簡單にして, Silurian 又は Devonian 時代の粘板岩及珪岩と 之を貫通する 斑狀岩 とより成り, 兩者の接觸點に於ては粘板岩は hornfels に移化す。礦床は之を次の4つの type に別つ。(1)含金石英脈(2)鉛重晶石礦脈(3)銀錫礦脈(4)錫石黃鐵礦脈。之等のうち第3のtype は最も重要して本篇に於ては専らこの礦床に就て記載せらる。この銀錫礦床は新第三紀時代に構成せられたるものにして, 附近の diorite porphyry よりも後期に屬す。この type の礦脈を Purissima vein system と稱し, Socavon de la Virgen, Itos, San Jose 等はその主要なる礦床なり。

一般に、礦脈は 160 cm~1 m の幅を有 し、黄鐵礦及石英を主要なる成分礦物と なす。脈壁は通常不明瞭にして、黄鐵礦の 母岩中に散布するもの多く,一部は單に 裂罅充塡と思はる」ものあれども、概ね 交代型に屬するものと考へらる。脈石と して石英, 明礬石, augelite 等を生じ, 金屬 礦石としては次の多數を舉げらる。即ち hypogene minerals としては黄鐵礦, 硫砒 鐵礦,磁硫鐵礦,閃亞鉛礦,黃銅礦,錫石,黃 錫礦, freibergite, andorite, bournonite及數 種の lead-sulpho-antimonide あり, supergene minerals としては metastibnite, アン チモン華, 白鐵礦, 褐鐵礦, 赤鐵礦 jarosite 等を有す。礦石は一般に石英2~86%, 黃鐵礦 40~90%, 硫砒鐵礦 1%, 錫石 4% 黄錫礦 2%, freibergite 3%, andorite 1%, 及 jamesonite 若干を含む。著者は各礦床 の形態,各礦石の詳しき 記載及 最後に礦 床の成因に就て論及せり。(Econ. Geol.,, 26, 453~479, 1931.) (中野)

2229 造山壓による礦石の集中 Haarmann.

岩石並に礦石はその種類によつて壓力による影響を 異にするを 以て,壓力によって變形し易きものは漸次壓力に乏しき 方面に集中すべしと論じ,Rmmelsberg その他多數の 礦床は,この方法にて 現在の位置と形態とを保つに至れりと述ぶ。 (Met. u. Erz. 28, 433, 1931.) [渡邊萬]

#### 石油礦床學

**2230**, Zwolle 油田の石灰岩含油層 Kamb, H. R.

Zwolle 油田の石油は非常に不規則なる 産狀を呈し,其含油層は一般にChalk Ser ies の上層なる zwolle marl なりと信ぜら れたり。然るに鑿井の結果によれば、こ の marl は硬質にて石油を含有せず。當 地方の地表並に地下構造は斷層裂罅及多 孔帶が存在し,產油帶は大なる 斷層を有 する fracture zone と推定せらる。而して 石油は mori と不整合に接する下部の chalk series の最上部に存するものなり。 即ち Chalk Series o erosion surface は 多孔質となり、marl の沈積後に於ける地 殼變動によりて fracture 及 fault が生じ石 油は Chalk Series の 2 次的間隙及 fracture zone に集中せるものなり。Howard の含 油層分類によれば fracture 石灰岩及不整 合を含油層とするものなり。(B. Am. A. A. Petrl, Geol., 15, 1293~1295, 1931.) [八木]

2231, 北米の石油に就て Sidney Power 本論文は北米の石油の産狀,成因,含油

層等に就きて概論せるものなり。北米の 石油は古生代より第三紀迄の全ての地層 中に産し、大略次の構造に存す。東部油 田はアパラキャン 山脈と平行し、著しき 褶曲地帶には 五斯を産出し, 西部に 於て は石油及瓦斯は僅かなる褶曲帯にあり、 其兩方なる中央油田にありて波狀褶曲帶 に産す。Midcontinent 油田は緩慢なる褶 曲地帶なり。太平洋沿岸油田は其者と同 様なる産油地帯なり、Rocky mountain油 田は石灰岩及不整合を含油層とするもの なり。而して Rocky mountain 以東の石 油は殆ど古生代のものなり。石油成因は 堆積岩中に存する有機物が堆積岩の脱水 揮發分の發散等の如き漸次的岩石化作用 によるものなり。即ち石油母層は有機物 を含有する頁岩及石灰岩なり。アメリカ 油田の石油は一般に背斜構造に集中し、 一般に緩慢なる褶曲帶に存するも, California には山脈地帯の著しき褶曲に存す るものあり。 含油層は 砂岩 石灰岩, 白雲 岩等なり。石油採收率は15~20%なり。 (Petl. World,, 28, 53~58, 1931.)(八木) 2232, 歐州の石油層に就て Moor, A.

現在の含油層は石油母層より移動集中せるものにして、石油は多孔質或は裂罅の多き地層中に移動し、多孔質層中にありては特に不均質なる部分に移動し居るものなり。而して歐洲に於てはこの移動の時代は多くは第三紀なるも、Kaukasus、Rumänieに於ては洪積層及沖積層中にも認めらる。石油は現世海底堆積物中にて僅少ながら生成せらる。而して地質時代の頁岩中に存する polybitumen は加熱に

よりて ekgonobitumen に變化するものにして,地下にありては 150° にて油化するものと推定せらる。歐洲の石油母層は一般に 3000~500 米の深さにありたるを以て polybitumen の油化には充分なる温度なり。即ち石油母層は polybitumen を含有する 堆積岩にして,石油生成は 初生的にて含油層の生成は造山作用によるものなり。(Petrol., 27, 711~723, 1931.)

#### 2233, 芳香族炭化水素の檢出法

Manping, A. B., Sheperd, M. E.

芳香族炭化水素は98%の硫酸に作用せ らる」ものなるも、完全には sulfonate せ ざるものなり。筆者は飽和炭化水素より 成る揮發油中の芳香族炭化水素の輸出法 として、この炭化水素を揮發せしめ 98% の硫酸と硫酸銀との2~3%の混合液に吸 收せしめたり。この方法は約 0.8%の過 多の値が得られ訂正を要するものなり。 而して ethylene 系の 炭化水素の存する 場合は應用せられざるものなり。不飽和 炭化水素は80%の硫酸によつて除去し得 るものなるも, ethylen 系のものは硫酸に よつて重合せられ完全には除去し得ざる ものなり。斯の如き場合には10%HNO3 (dis 1.4)或は 98%の硫酸に16%の KNO3 を含有せしめたる溶液にて芳香族炭化水 素を nitro-dérivés に變化せしめて測定す, 即ち資料を前記溶液中にて 2~3 時間熱 して完全に 硝化せしめ, 次に 水を加へ, benzene 50 c.c にて nitro-dérivés を抽出 し,10% の苛性曹達にて中和し benzene を蒸發せしめて定量するものなり。

(Revue Pétrolifére, 38, 1125~1126, 1931.) (八木)

# 2234, パラフイン系炭化水素の物理的性質 Shepard, A. L., Middgley, J.

資料は normal paraffin hydrocarbon 70%を含有する揮發油より蒸餾によつて分離し,次に CISO<sub>3</sub>H にて處理し精製せるものなり。斯くして分離せる C<sub>6</sub>H<sub>12</sub>, C<sub>6</sub>H<sub>14</sub>, C<sub>7</sub>H<sub>16</sub>, C<sub>8</sub>H<sub>18</sub>, C<sub>9</sub>H<sub>20</sub>, C<sub>10</sub>H<sub>22</sub>, C<sub>11</sub>H<sub>24</sub>, C<sub>12</sub>H<sub>29</sub> に就きて、これ等の沸騰點溶融點、20°及 25°の比重屈折率粘稠度等を測定せり。(J. Am. Chem. Soc., 53, 1948~1958, 1931。)[八木]

#### 窯業原料礦物

#### **2235**, 耐火性酸化物の熱膨脹 Austin, J. B.

耐火物の熱膨脹研究の前提として各酸 化物の純結晶の膨脹狀態を測定せり。裝 置は Pulfrich-Fizeauの interference method を改良せるものなり。各供試結晶の主 軸に 平行及び 垂直の兩方向に就て 20~ 1000°C 間の線膨脹を 測定せる結果は別

	1000°Cの 全 膨 脹	SCHOOL SECTION	熱傳導度 (500°C)
KgO	1.350%	13.77×105	$103 \times 10^{4}$
α-Al <sub>2</sub>	0.885	9.03	83
O3 /T	0.815	8-31	
ZrO2 {/	0.566	5.92	42
1	0.785	8.92	
FeO. Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.798	8.13	39
ZrO2 (/	0.480	6.19	
SiO <sub>2</sub> (_	0.284	3.66	,
Mul- //	0.553	5.66	
lite \_	0.440	4.51	

表の如し。

膨脹性を比較するにマグネシャは最大を, ムライト及びジルコンは最小を示す。 この關係は破壊傾向の概測上重要なり。 又單晶と楽品との膨脹に就ては未だ結論 には達せざるも, 一般に多孔質集合晶は 單晶に比して膨脹性小なり。(Jour.Amer. Ceram, Soc., 14, 95~81, 1931.)〔吉木〕

#### 2236, 含 ZrO<sub>2</sub> 珪酸½熔融物の研究 Bartlett, H. B.

ZrO2·SiO2, ZrO2, Al2O3, カオリン 及熔劑を配合し棒狀とせるものを電弧爐 内に於て熔融せり。熔融物は流水中に急 冷せる後、顯微鏡的並に X線にてジルコ ン化合物の晶出狀態を研究せり。ジルコ ン(ZrO·SiO<sub>2</sub>)を熔融せるものは 再び原 結晶を生ぜず,屈折率 1.80 の褐色繊維狀 を呈し, 單斜型 ZrO2 の結晶相と硝子, 時 には cristobalite とに解離せり。又 50% ZrO<sub>2</sub>, 50% SiO<sub>2</sub> の熔融物には不混和性 が存し,2液相より成れり。ZrO2-Al2O3 SiO2 系として11% カオリン,89%ジル コンの熔融物を作れば,亦 ZrO2 の褐色 繊維物を生ぜり。然るに Al2O3 の増加 と共にムライトを晶出す。同混合物に熔 劑添加の影響を 騒せしに, 急冷物は全く 硝子のみより 成れども, 之を 燒鈍する時 は結晶作用を始む。熔劑の種類により晶 出化合物に差異あり、即 CaO, MgO を用 ひたる時はZrO2SiO2を牛ずるも、Li2O を用ひたる場合にはLi2OとSiO2との 親和力一層大なるため ZrO2 の晶出を見 たり。(Jour. Amer. Ceram. Soc., 14, 837~843, 1931.) 〔吉木〕

#### 2237, 人工 Hydrargillite の熱分解 Achenbach, H.

水酸化礬土の脱水變化に關する前研究 者の結果を 論評せる後, 著者の 周到なる 研究を 述たり。 礬土曹達より作れる trihydrated aluminium 結晶を蒸氣壓 0 mm 及 12 mm Hg に於て加熱脱水せしめ,そ の間の變化を光學的, X 線的或は比重及 熔解度の測定により精査せり。Al2O3・ 3H2Oは0mm Hgに於ては200°Cより、 12 mm Hg に於ては 215°C より 2分子の 水を失ひ,新結晶相 AlaOa·HaO を作ず, 之は斜方晶系に結晶して Böhmite に一致 し, 複屈折弱く, α'=γ'=1.624±0.003 と す。Al<sub>2</sub>O.II<sub>2</sub>O は 350°C より更に脱水 し一部は 1000°C 以上に及ぶ。かくして Y-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> を生ずるも, X 線干渉は温度の 上昇と共に明かとなり、900°C に於て完 全となる。その屈折率は1.693+0.003と す。1000°C 以上に加熱すれば Y-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> の外にα-Al<sub>6</sub>O<sub>3</sub>の廻折線を現はし,1100° C以上に於て corundum となる。上記の 分解が極めて急速に脱水されし場合には Al2O3·H2O或は Y-Al2O3 の Umkristapization が途行し得ずして, 著しき擴散狀 態を示し,前研究者の 結果に 見るが如く 明瞭な階程を認め得ざるなり。(Chem. d. Erde, 6, 307~356, 1931.) (吉木)

#### **2238**, 硝子の腐蝕研究 Kahlson, W. S.

弗酸による硝子の腐蝕反應は先づ Sllicon tetrafluoride を生じ,容易に水を吸收し hydrofluosilicic acid となり,この珪酸は加水分解により珪素水化物に變ず。この反應速度は弗酸の濃度及溫度に關係す

る普通光の分散をよくするためには弗化 アンモニヤ, 弗化曹達を 混用す。この腐 蝕液が硝子と接觸するや表面を侵し,更 に接觸する 時は液の 粘度を増し, 反應生 成物の 擴散が妨げられ, 硝子の 表面に hydrofluosilicic acid の環層を生ず,之が 弗化アンモニヤと反應して弗酸を遊離し 一方 Ammonium silico-fluoride を沈澱す。 該沈澱物は多角体をなし、六方晶又は立 方体に結晶す。一方腐蝕液が硝子を侵す や, 初めは表面を一様に熔解するも, 次第 に侵蝕面は幾何的蝕像を生ず。結晶は凡 て錐体をなし,其數は1平方糎につきほど 1,100,000を算せり。かよる腐蝕液の作用 は硝子の成分により異る。現在各種硝子 に適當せる腐蝕液を得るには侵蝕作用の 化學的過程に就て尚研究すべきものあり (Jour. Amer. Chem Soc., 14, 827~832,) 1931.) [吉木]

#### 2239, 耐火煉瓦の熱傳導度 近藤清治, 吉田博

著者等は耐火煉瓦につき 1200°C までの熱傳導度を測定せんとし、一般の方法に做ひ供試体の一面を熱し、其反對面に傳はる熱量を小型水熱量計を以て驗測せり。其結果は別長の如し、

實驗溫度範圍內の平均傳導度を同一氣孔 度に換算する時はマグネシャ煉瓦最も高 く,クロム, 珪石, 礬土質煉瓦之に次ぎ,シ ヤモツトと 懶石煉瓦は 略等しく,耐火煉 瓦中の最低位に在り。普通煉瓦及礦滓煉 瓦は更に 低く,イソライトに 於て特に低 し。(窯協雜, 39, 657~663, 昭 6) (吉木)

,	氣孔率	溫度範圍一	平均熱 傳導度
シャモッ ト煉瓦	29.1%	163 <b>~</b> 1223°C	0.00235
'蠟石煉瓦	23.9	247~1223	0.00250
珪石煉瓦	20.1	270~1200	0.00348
高馨土質 煉瓦	33.4	270~1120	0.00251
クロム煉瓦	29.3	270~1227	0.00342
マグネシャ煉瓦	21.4	219~1163	. 0.00474
普通煉瓦	40.2	69~871	0.00163
礦滓煉五	38.4	32~876	0.00142
イソライト珪藻土	66.4	160~1092	0.00056

# **2240**, 高温度**窯業中に於ける**金屬の用途 Wiliiams, S. E.

窯業中高溫に於ける金屬の用途は主に 乾燥及燒製作業に限らる。鋼鐵は普通な る構造材料にして、扇風機の 羽根はクロ ム・ニッケル・ステンレツス或は又銅 87、ニ ツケル8 鐵 5%の合金を以て作られ、モネ ルメタル及アルミニュームも時に此の羽 根として用ひらる。硝子を壁出する型と しては微網粒 鑄鐵が主に 用ひられ、若し もクロームが此の型にメツキされるなら ば、型の生命を善くする事を得べし。 (Rept. of Symposium on Effect of Tem perature on Properties of Metals. Amer. Soc. Mech. Eng. and Amer. Soc. Test. Mat. 120~135, 1931.) (遠藤)

#### 石 炭

2241, :石炭及石炭製品中の Germanum'の存在 Goldshmidt, V. M.

彼はその研究せる元素の地化學的分布 の條件よりして、含 Ge 礦物の分布が少く

その一般的分布も少きを疑問とせり。 Ge はその原子番數 32 にて偶數且つ比較 的小なるを以つてその分布は可なり大な るべきなり,しかるに結晶化學的研究の 結果 Ge+4 と Si+4 とはそのイオン牛徑 も性質も類似する為め珪酸鹽中に存在す ると考へ、且つ GeO2は SiO2 に比し水 に甚だ溶解し易き爲め,石炭中に集積せ るにはあらずやとの考より,各種石炭,褐 炭及その製品(Pitch)を分光化學的及びX 線的定量法によりて分析せるに石炭中に 0.001%~0.01% 汔の Ge を含有し,その 灰分中には 0.01~0.1, 時に 0.5%の Ge を 含めることを知れり。又Ge は揮發し易 きを以つてAsと共に Pitch 中にも含ま れ居るを知れり。又石炭を化學的に處理 して,その溶液中の量をも研究せり。

(Nachr. d. Gesell. d. Wissen. zu Göttingen. 398~4012, 1930) (高根)

**2242**, **Fichtenlignin**, 腐植酸及腐植 質の化學構造に關する新研究 Fuchs. W. R. Daur.

Fichtenholz の不溶性木質素は少量の 鹽酸の存在に於いて Methylglykohl に溶 解せしむることを得。 Methylglykohl 溶 液より水にて沈澱せしめたる物質(後述 Methylin)は單一物質に非ずして、Ather、 Aceton、Chloroform 及 Methylglykohl の 4 有機溶劑を用ひて 4 成分に分つを得べ し。著者は之等の木質素 Methylglykohl 誘導体を簡單に Methylin と名付け、その Methyl 誘導体の化學的研究、Methylin の 加里熔融による分解現象の研究を行ひ、 物理的性質例へば粘稠度、X 線的恒敷、分

子量等を定め、木質素の Stochiometrische | Moekul を推定せり。

又之に關連して,木質素より自然の作 用によつて生じたる, 腐植酸及び 腐植質 | 往々葉全体の石炭化せるものを見受くる (Humin) の上記分子構造を既に著者の **發評せる諸研究結果に照して推定せり**の (Brennstoff-Chem., 12, 266~268, 1931) 〔鶴見〕

#### 2243, 骸炭用石炭に混する物質の粉末度 の重大性に就て Hock, H.

良好なる骸炭を得るが為に骸炭用石炭 に Fusain 或は半骸炭等が混 じらるム事 は一般に注意さるム所なり。

著者はこの事實に關する最近の發見及 見解に就て述べ、混合物質の 粉末度の大 なる程良好なる骸炭の得らるべき事實を 指摘し之が證明を試み, 實用上の成功に 關して上記混合物質と石炭とを混ずる際 に注意すべき事即ち一様に混ずる必要の ある事を注意せり。

猶ほ本論文は Glü.dkauf 誌 (636, 1931) より轉載されたるものにして、H. Böunemann 氏の英譯 なり。(Fuel, 10, 254~ 256, 1931.) [鶴見]

#### 2244, 木質素成因説に關する新研究 Lieske, R., Winzer, K.

本論文は Lieske, Fuchs 兩氏が昨年中 發表せる木質素成因説に關する新しい根 據に對して試みたる Potonie' 氏の所論 に答へたるものなり。而して Potonie'氏 の木質素成因説に對する反對論は現在に 於ける木質素成因説の難點として論ぜら る」ものを代表し次の三點に歸するを得 べしの

第1は葉の化學的組成に關する問題に して,薬脈以外の薬構成分子には木質素 ・は含有されずと考へらる」にも抽はらず 事なり。

第2は化石木の比重に關する問題にし て,木質素成因説に従へば多くの物質が 消滅するに抽はらず化石木の多くは材料 樹木より大なる比重を有する事なり。

第3は Torfmoor に於ける繊維素の分 解に關するものにして, Moor の比較的深 部に於ては微生物の作用は活潑に行はれ ず從つて多量の繊維素が木質素成因説の 説くが如く消滅するものと考ふる能はず と云ふにあり。

著者は之等の問題に對して夫々實驗を 試み次の如く反駁を試みたり。

第1の問題に關しては,葉脈及之を除 ける葉の構成分子は略々等量の木質素を 含有するが故にその謂れなきを主張し、 第2に對しては,著者の實驗せる化石木 (亜炭)の比重は材料樹木より輕く正に繊 維素の消滅せる 事を示し,往々存在する 比重の大なる化石木は有機無機兩物質の 浸透により重くなりたるものと推定し、

第3に關しては、繊維素が極めて稀薄 なる薔薇によつても加水分解せらるい事 實を確め,以て Moor に於ける pH 價が たとへ4以下なりとするも長年月の間に は加水分解によつても繊維素は消費さる ムものなりと論じたり。而して Moor に 於ける酸性は微水物の働に脅ふものなり ≥ → (Brennstoff-Chem., 12, 205~210,

1931) [編見]

#### 2245, 過マンガン酸加里による稀溶液中 の腐植酸測定に就て Kreulen, J. W.

腐植酸の定量法として用ひらると比色 法は基準腐植酸溶液と試驗腐植酸溶液と の間に往々色調に差異あるを以て滿足なる結果を得られ難し。此の弊を除く為、 著者は KMnO4 溶液を以て滴定する方、法を考案せり。元來是と同様の方法は既に Istscherikow 氏及び Aschman, Faber 兩氏の試みたる 所なれども, これ等は 方法上の鉄陷の為に, 不正確たるを 免かれずりき。

著者の考案せる方法はKubel 氏の有機物質定量法と同案のものにして,先づ腐植酸溶液の濃度と KMnO4 消費量との關係を求めその關係に照して未知の腐植酸溶液の濃度を求むるにあり。この方法に從へば誰れも比較的 致した結果に到達するを得べしと。唯し腐植酸の溶液は明るい場所にては勿論暗所に於ても多少の變化を受け KMnO4 溶液の消費量を減ずるものなるが故に可及的新しき溶液に就て定量するを要す。猶ほ本法に於ける腐植酸溶液は勿論アルカリ溶液の云にして,KMnO4の濃度は100 Nなりとす。(Brennstoff-Chem., 12, 265~266, 1931.)[鶴見]

## **2216**, **印度炭の球狀構造に就て** Bhola, K. L., Majed, M. A.

印度の球状炭に関しては H. S. Das Gupta 教授の論文あり。而して印度産球 状炭の成因に關しては次の説あり。

- 1. 水流の作用によるとするもの。
- 2. 冰河の影響となすもの。

3. 火成岩の dyke に基くとするもの。 上記 Das-Gupta 教授は之等の説を退 け, Jointing の結果なりと論じたり。

著者等は Jharia 及 Raniganji 炭田の 炭層中に見らるム球駅炭の産出状態及 Jointing との關係を微細に觀察して, Das-Gupta 教授の見解を支持せり。而して Jointing は壓力或は Friction によつて生 じたるものなり。(Fuel, 10, 330~331, 1931)〔鶴見〕

#### 2247, 亞炭の研究 小田良平

中部日本尾張美濃地方より選出せる老中若三年代の亞炭及乾鮮褐炭の示性分析を試み, 亞炭の繊維素含有量は 炭化度の進行と共に 急速に 減少し, 腐植酸含有量は炭化の初期に増加し後減少しそのメトオキシル基は若年炭に多量なる事實を確め, 腐植酸を生ずるに 先ち木質素より中間成生物質を生ずる 事を認め, 腐植酸をアルカリに可溶性の物質群たりと認定せり。

次で中年亜炭より製したる腐植酸に就てその性質を確め、一分子中のヒドロオキシール基及(1.87%)カルボオキシ基(11.70%)の含有量を推定せり。

循ほ著者は中年度の 亜炭、上記の 腐植酸葡萄糖より 製したる 人工腐植酸, 木質素及木綿紙の低温乾餾試驗及油狀成生物の分餾試驗を試みたれども, 未だ亜炭の成因に關係ある結果に到達するに到らざるもの \ 如し。(Scientific Pap. 17, 22~31, 1931.) [鶴見]

## 參考科學

**2248**, マグネシュウムに就て Tyler, P. M.

最近マグネシウムの押出鍛造其の他の製作法が進步せるため標準形の杯アングル管を得らるムに至り、マグネシウム線及リボンは主にラヂオ工業の瓦斯排出辨に用ひらる。アルミニューム7%及マンガン0.4%を含むマグネシウム合金の熱處理を施したものは,飛行機の構造材料殊にエンヂン鑄物に盛んに用ひらる。此の合金は 抗張力 32,000 封度/平方时 及8%の延伸率を有す。(Min. Ind. 38,421~423, 1930.) (遠藤)

2749. 亞鉛及び鉛の錫に對する擴散に就 て Merz, A., Brennecke, E.

260°~360° に於ける前記の擴散係數 を實驗的に測定せり (Zeits. f. Metk., 2, 185, 1930.) [渡邊萬]

**2250**, **ア**ルミニユームの新用途 Mcutell, C. L.

アルミニュームの世界産額は年毎に増加し、特に最近大なる構造材料として懸延及强力なるアルミニューム合金を製造する事を得るに至り、又建築材料に於ける新しき装飾金屬として應用せらる」に至れる為めにアルミニュームの用途は著しく増加せり。(Min. Ind. 38, 14~30, 1930.) (遠藤)

#### 2251, ベリリウムの用途 Anon.

ベリリウムの慣値は、合金鋼に於ける モリブデン及バナデウムの如く、他の合 金に良き性質を興ふる為めに加ふる少量 添加金屬として,純金屬 としての用途は 唯X-線管の窓に用ひらるこのみなり此の 場合にベリリウムは従来用ひられたるア ルミニュームの 17 倍の透過度を有す。 (Min. Ind. 38, 690~691, 1930.)(遠藤) **2252, 焙鑛爐滓の**鐵割れの原因に就て Guttmann A. Gille F.

熔鑛爐滓の「石灰割れ」は「鐵割れ」と區 別せざる可からざる事は既に報ぜられた る所なるが著者等の研究によれば「鐵割 れ」の原因は通常の條件の下に於てはCa 及び Mn と結合する滓中の硫化物構成硫 黄が特別なる高爐操業に於て Fe 或は Fe 及び Mn と結合するによると云ふ。から る滓は水中或は濕潤なる空氣中に於ては 水化作用により或支武岩の如く表面より **罽壞す。此現象は溶媒中にアンモニアイ** オンの存在により抑止され得。又此の知 き滓を 1000°C 以上にて熱處理をなせば 分解の原因を除き得, 循「觀割れ」を起す 滓は牛鑛降り或は混銑爐又は鑄型注入に 際し長く滓を鐵と接觸せる時生ずと言ふ (Stahl u. Eisen, 51, 210~211, 1931.) (鈴木)

## 新利紹介

礦物辭典 木下龜城,石井清彥,青山信雄,赤木健,村山賢一,佐藤戈止,鈴木達夫 共編

編者の序文に據れば、本書は 礦物學岩 石學及び礦床學に關する主要なる術語を 解釋し、併せて邦語と英語との 對譯を試 みたものにして、總數五干數百の術語を 先ご英語にてアルフアベット順に並べ, これに一々 邦語譯を添へ,且つ 簡潔なる 説明を加へたり。例へば礦物名に就ては 化學成分,結晶系,及び物理化學的性質の 概要を記し,岩石に就ては礦分成分,構造 産地等を述べ,術語に就 てはその 意味を 要約せる上,多數の挿圖を加へて 諒解に 便にせり。

術語は單に岩石礦床學専問の字句に限らず、斯學に關聯する物理、化學上の術語例へば Geometrical isomerism, Invariant point, Britania metal 等の類を含み、また例へば大沼石、間瀬石の如き 本邦石材の通解をも加へたり。

次にそれらに對する邦語をヘボン式ローマ字にてアルフアベット 順に並べ,之に漢字又は片假名の,邦字を添へ,更に英字を加へて 和文英譚に傾にし,最後に元素表,礦物分類表,岩石分類表等を加ふ。

以上併せて「總頁數 558 頁に亘り, 縱 6 寸, 橫 3 寸 5 分, 總クロース字書形の本綴 にして使用。

本書の従来發行せられたる地學字彙等 と異なる點は,單に術語の 英和並に和英 對譯のみならず,一々 簡潔なる説明 を加 へたる點 にして,岩石,礦物,礦床學の學 修並に研選に從事する者 にとつて,極め て傾宜なるを失はず。(東京神田區淡路町 1 の 1, 綜合化學 出版協會發行, 定價 3 圓 50 錢) 〔渡邊萬〕

#### 會報及雜報

總會及び聯合講演會 本會第四回總會 は來る4月2日京都帝國大學に開催,續 いて本會並に東京地質學會及び地球學團 聯合講演會を同所に開催すべく其詳細は 本號廣告欄を參照すべし。

港間山また爆發 昨年8月の活動以來 暫らく靜止の 狀態に在りし港間火山は, 去る12月8日午前7時35分大鳴動と共 に爆發し,引續き2回の小爆發あり,新聞 紙上各地の情報を綜合するに,當時山麓 は霧に鎖されしも,山頂は好晴にて,黑煙 高く天に冲して,その上端初茸形に擴が り,折柄の烈風に東南東に流れ,埼玉,茨 城方面に達せり。

その結果、輕井澤附近にては7時45分頃より約5分間小豆大の降石ありしも降灰なく、却て横川、松井田方面に雨を交へて降灰あり、9時乃至9時30分には秧父地方また降灰に見舞はれ、所澤附近に及べり。高崎附近は爆發に伴なつて地震を感じ、地震様の震動は遠く土浦に及べり長野原、北輕井澤方面には異常なきものの如し。〔渡邊萬〕

# 本會總會並に東京地質學會・地球學團日本火山學會との聯合講演會開催豫告

開催地 京都

開催期日 昭和7年4月2日(土),3日(日)

講演希望の方は演題及講演所要時間(20分以内)を記し2月末日 迄に東京帝國大學理學部地質學教室內東京地質學會宛 申込ま れたし

因に講演申込多數なる特は講演時間の短縮又は申込順により謝絕の 止むを得ざることあるべし

又参考展覧會に出品御希望の方は標本説明書を送附されたし尚4月 2日夜には聯合懇親會、會後4日には見學旅行を行ふ豫定なり

昭和7年1月

日本岩石礦物礦床學會

は詳初本輓 必述學書近 讀し者はにのいた此於 良木難缺け 書下解點る と理とを鑛し學さ補物 て博れひ學 推士た且の 奨はるつ進 す地形鏃北 る質態物は を調結學者 恒查晶全し ら所學般き ずにをにも 内於最百の 容けもりな のる判でれ 新多り極ど 鮮年易く明想等 挿際細切等 畵研にに の究説詳新 豊よりははいままでは、りょうない。 る物併の實 説化せ 青陽 一の銀理し 明鑛物學確物物士

ふび最校の

一讀して其眞價を知。 四 回 八 優 金 四 回 八

知られれる新品を利力ではある。

にをり

近 な成理は載 る国際等等を表する。

理理學 刊新最 學 恒

士士か期筆物本始て鑛 にせ者物書め居物

青木座らは理にてら墨 右れ何の收模なに にたれ全む範い關 るも般る的です 山下本結斯に所辭とる を晶界豆の典れ辭

備でのり術をは典 へあ權約語上此の 信龜らる威六は梓種刊れ 。者干、しの行 よ故に語鑛で辭は

○にしを物廣典從 雄城 如て選學くの來 何全びに江出屢 に部之關湖版々 共 本のにすにが企 書稿解る薦決 老 のを試總めしら 内脱をて得てれ 容す試のる容で のるみ科光易居 內

かすの物るなる はるままる。 いが 事今 を日 推兹も 語に 察にな鏡 る到 に四る床 \$ 3 のま

容

見

本

進

呈

定挿原菊

色版

圖版上

圆 百别百

四十四版

よ研造験れ錢錢圖葉頁にをりず

銅十

四

うき結 る研和晶 も鑽英 '對寶 と討譯石 信議を、
ず、附建 る蘊し築 ○蓄た材 斯をも

らだに と此 思種 はの れ良 る書 がは 學傾の鑛 本世 研けで物 協に 究てあ化 會公 者完る學 はに は壁 兹さ 速を執鎖

理理理理 學學學學 博 士士士士 赤青石木

木山井下 信清龜

健雄彥城

理 理 理 學 壓 學 士 士 + 佐 村 藤 Ш 戈 睯 夫 止

編共

內 容見本進早

定 插

判 圖 金 薄 表 栄 紙 約 五. Ŧi. 頁

七八二九七京東替振三一二四田神話電

會協版出學科合綜

でで

あ未

區田神市京東 一ノ一町路淡

#### 本 役

會長神 津俶站

幹事兼編輯 渡邊萬次郎 高橋 純一 坪井誠太郎

庶務主任 益田 峰一 會計主任 瀬戸 國際

圖書主任 加藤謙次郎

#### 問(五十) 本 會顧

伊木 常誠 石原 富松 小川 琢治 大井上義近 大村 一藏 片山 量平 金原 信泰 加藤 武夫 河村 幹雄 佐川榮次郎 佐々木敏綱 杉本五十鈴 竹內 維彦 田中舘秀三 德永 重康 野田勢次郎 中村新太郎 平林 武 保科 正昭 松本 唯一 松山 基節 松原 厚 若林彌一郎 并上禧之助 山田 光雄

#### 本誌抄錄欄擔任者(五十)

上田 潤一 加藤謙次郎 河野 義禮 鈴木廉三九 瀨戶 國勝 高橋 純一 高根 勝利 鶴見志津夫 中野 長俊 根本 忠寬 吉木 文平 益田 峰一 八木 次男 渡邊萬次郎 渡邊 新六

昭和六年十二月廿五日印刷 昭和七年一月一日發行

#### 編輯兼發行者

他豪市東北帝國大學理學部內 日本岩石礦物礦床學會 右代表者 益 田 峰

印刷者 仙臺市教樂院丁六番地 鈴木杏 策

印刷所 仙臺市教樂院丁六番地 東北印刷株式會社 電話 287番 860番

入會申込所 仙臺市東北帝國大學理學部內

日本岩石礦物礦床學會 會費發送先

右會內瀨 戶 國 脖 (振替仙臺 8825番) 本會會費

华ヶ年分 巻 圓 (前納) 一ケ年分六圓

賣 捌 他臺市國分町

丸善株式會社仙豪支店 (振替仙盛 1 5 番)

東京市神田區錦丁三丁目十八番地 京 (振替東京 270番)

本誌定價(郵稅共) 一部 60 錢 3圓30錢 6圓50錢 半ヶ年分 豫約 一ケ年分 豫約 本誌廣告料 普通頁 1頁 20 圓

半年以上連載は4割引

昭和六年十二月二十五日印刷約本 昭和七年一月一日 發 行

## Mineralogists, Petrologists and Economic Geologists.

#### CONTENTS.

Chemico-petrographic studies of pumice, poured out from

Komagataké in 1929 (2)S. Kôzu, R II., K. Seto, R. S.		
Aegirine-augite glaucophane quartz schist from Teshio,		
HokkaidoJ. Sudzuki, R. H.		
Supplementary note on the anorthite from Miyaké-jima		
and Tarumaé,S. Watanabé, R. S.		
Anhydrite in new ejecta from KomagatakéB. Yoshiki, R. S.		
Short article:		
Chemical composition of lepidomelane from		
Miask, UralS. Tsurumi, R. S.		
Editorials and Reviews:		
Structure groups in crystals		
Abstracts:		
Mineralogy and Crystallography, Some consideration upon		
" nagatelite " etc.		
Petrology and Volcanology. Origin of bread-crust bombs etc.		
Ore deposits. Some association of ore minerals etc.		
Petroleum deposits. Oil-bearing limestone in the Zwolle oil-field etc.		
Ceramic minerals. The thermal expansion of some refractory oxides etc.		

New Book

Notes and News.

Published monthly by the Association, in the Institute of Mineralogy, Petrology Economic Geology, Tóhoku Imperial University, Sendai, Japan.

Coal. Germanium in coal and its products etc. Kelated Sciences Magnesium metal etc.